俚諺辭典補遺

あ

愛緣奇緣。

合ふ〻合はぬも緣によるといふことにて、或は夫婦となり、或は主從となるも、皆緣なりといふほどの意なり。もと佛語に出でし語にて、初より愛する緣と、次第に機を得て愛する緣とあるをいふ。

鸚鵡返し。

人の己れに向つて言ひし言葉をまねて、直に返し言葉を以て相酬ゆるをいふ。鸚鵡は人の言葉を眞似て、聲を發する故にかくいふ。

鸚鵡の人眞似。

人の言葉に倣ふて、能く其の通りの言說を爲すものをいふ。前の諺見るべし。

鸚鵡能く言ふ。

徒に言說するのみにて實行せざるものをいふ。「禮記」「鸚鵡能言不レ離二飛鳥一、」

赤犬が狐を追ふ。

新潟地方にて言ふ諺なり。彼是優劣のなきこと、畢竟同じ類にて區別なしとの義ならむ、赤犬の毛色は狐の毛色に似たるものなり、追ふものも、追はるゝものも相似たりとの意。

赤いは酒の咎。

顏の赤きは酒の咎なりといふ意。

藜の杖で轉ぶと三年生きない。

俗說。

上り目下り目。

變心し易き人のことをいふ。是れは子供が指を目の傍にあてゝ、廻す戲れに、あがり目さがり目、ぐるつと廻つて猫の目といふ如く、猫の目は能く變るもの故か

くいふなり。

秋梭魚嫗に食はすな。

かますといふ魚は秋最も美味なりといふこと、世の姑は嫗を憎むが例なり、故に姑が嫗に食はすなといへば、其美味を意味するなり。

秋鯖は嫗に食はすな。

鯖といふ魚は秋最も美味なり、諺の意は秋鰤嫗に食はすな。に同じ。

秋茄子嫗に食はせて七里逐ふ。

姑の嫗を憎みたる上に憎みて、非常に虐待するほどの意なり。秋茄子は子宮に害あるもの、七里逐ふは遠き所に逐ひやること、秋茄子嫗に食はすなの條と對照すべし。

安藝の極樂黒田の地獄。

往時德川幕府の頃、江戸霞關に、安藝(淺野)黒田二侯邸ありて藝州侯の門を出入するは寛なりしも、黒田侯の門は嚴重にして、出入容易ならざりし故に此の諺ありしなり。

秋の日と娘の子はくれぬやうでくれる、春の日と繼母はくれそうでくれぬ。

秋の日は短くして暮れ易しといふも娘の子は婚を申込めば呉れ易しといふ春の日は長くして暮れさうでも暮れず繼母は繼子に物をくれそうでくれぬとなり。暮れると呉れるとをかけたるなり。

あけすけ言ふ。

腹藏なく言ふこと。

頤なし地藏。

下顎骨の短き人をいふ。隱岐に頤無地藏といふがあるよりかくいふなり。

朝雨に傘要らず。

朝降り出す雨は後に直ちに晴るといふ義なり。

朝起貧乏寐福の神。

元日の朝早起せるは貧乏、緩り寐るは有福なりとの義。

朝霧雨、夕霧晴。

朝霧の見ゆるは雨の兆にて、夕霧は晴天の徵なりといふと。「天時占候」「朝霧には雨降る、夕霧には晴を主る」

朝霧なければ晴天。

朝霧なき時は、其日天氣晴るゝ徵なりといふこと。

朝乞食と夕坊主。

朝乞食に出逢ひ、夕坊主に出逢へば緣起よしとなり。

朝酒門田を賣つて飲め。

門田とは家の門前の田地のことにて、所有の田地中最も貴きものたり。之をすら賣りてゝも朝酒を飲めといふは、朝は酒の味美なるをいふなり。又衛生に利ありとなり。

朝虹に川越すな。

朝虹に川を渡るなといふに同じ、川越すなとは川を渡るなといふことにて、若し川を渡りて、出で行くときは、歸りには雨の爲に川の水增して渡られざるに至れば、なりとの意。

朝寐坊晝寐を好む、夕寐坊偶ま起きては坐睡坊。

睡眠を貪るものをいふ。

朝紫に夕紅。

遠山の景色朝は紫に見え、夕は紅に見ゆとなり。

朝山夕山。

山の景色朝と夕とは雲霧の模樣にて遠く見ゆる故にいふ。漁夫の語。

朝夕をはからず。

急なる事起りて、夕まで考ふる暇なきをいふ。

足の向いた方へ行く。

何處に往くといふ目的もなく、興に乘じ意に任せて行くこと。「竹取物語」「足の向いたる方へいなんず」

足を重ね目を仄つ。

恐怖の狀をいふ。「漢書」「使ニ天下一重足而立。仄目而視。」

足を向けて寐られぬ。

恩義を忘れざることにて、嘗て恩誼を受けし人の方に足を向けて寐ずとの義。

飛鳥川の淵瀬。

變り易きこと。

明日は喇叭の泣き別れ。

兵卒を送うて別を惜む意、「俗謠」「一夜泊りの兵隊さ

んに惚れてあすは喇叭の泣き別れ」

新らしい煙管。

つまらないといふ謎、新らしい煙管はヤニがつまらざるなり。

暑さ寒さも彼岸まで。

暑さのはても彼岸まで、寒さのはても彼岸までといふに同じ。

當らぬものは夢と樗蒲いち。

夢判じといふものが當ること不確なる如く賭博も當ること稀なり、故にいふ。

後先息子に中娘。

總領と末子とが男子にして、中が娘なるはよき子持なりとの義。

彼の子生んだる親見たや。

よき子を見て其の親を羨む意、又あしき子を惡みていふこともあり。

阿房が酢に醉うたやう。

ゲラ〳〵してトリトメのなき形容。

阿房が男を待つやう。

當にならぬことを待ち居るをいふ。

阿房に法がない、榴木に鞘ない、摺鉢に蓋ない。

阿房に法がないといふより、對句にしてかく面白くひ續けたるなり。愚なるものは如何とも始末に終へずといふ意なり。

淡路のにぢり虚言。

淡路は島國にて交通乏しく、又聞きの風説に虚言を混じて語り傳ふるをいふ。

逢ひたいが情見たいが病。

思慕の情切にして、逢はんと欲し見んと欲するをいふ。

相手なければ訴訟なし。

相手とは被告のことをいふ、訴は原則として一定の相手方に對するものなることをいふ。

相手のさする功名。

自己の爲したる功名にあらず、相手の方より自然に、自己の功名となるやうに爲して得たる、偶然の功名なりといふこと。

油紙に火が付いたやう。

多辯なる形容。

油蟲。

油蟲は、植物の養分を吸收する蟲なり、故に人の富豪などに取り入りて其の利益を搾り取りて、己れの利得とする如きもの、喩とす。

油を取る。

他人を苛めて、之を苦しむる事。

逢へば五厘の損が行く。

狡猾なるものをいふ、逢へば直ぐ不利益を蒙るが故にいふ。

數多交りて事なかれ。

多くの人と交を結びて、爭ふことのなきやうにせよとの義。「北條五代記」「早雲寺殿廿一ヶ條の中に數多交りて事なかれと云ふ事あり、なに事にても、人に任すべきなり」

雨滴は三途の川。

雨滴は雨水の簷より滴り落つるもの、諺の意は人家を出でて簷を過ぐれば、既に死出の旅路に首途するものと覺悟すべしといふことなり。雨滴落は三途の川ともいふ。

天漢の中に星多き時は其年雨少し。

天象に關する諺なり。

天漢の中に星少き時は其年大に炎旱のきるし。

天象に關する諺なり。

甘茶を嘗めよ。

目を醒せと罵倒する詞。

尼や沙彌や茄子葹や。

小兒が人を嘗しんで罵詈する時にいふ。

阿彌陀も金で光る。

金錢を崇めていふ。

網呑舟を漏らす。

大賊の法網を潛りて、巧に罪を免かれ居るをいふ。呑舟とは大魚のこと、大賊の喩。

網に魚。
魚の網い中に在りて何れよりすくひ取らるゝか分らざる如く、到底遁れがたき運命なりとの義。

網もたずに淵に臨むな。
網ないくて淵に臨みそと同じ。

餡麺麭。
囲き顔の人をいふ。あんぱんは形圓し故に喩ふ。

あんぽんたん。
阿房といふことの洒落、萬金丹千金丹などといふ藥の名に擬したるならん、又阿房のあんぽんたんと、つゞけていふことあり。朝熊の萬金丹といふを、阿房のあんぽんたんと語呂を合せていへるならん。

藍は紺屋の紋所。
兒童が戯に人を呼び、あいと返辭すれば藍は紺屋の紋所と揶揄していふなり。

亞米利加後家。
海外出稼人の妻をいふ。夫の亞米利加に出稼ぎ中は恰も寡婦の如く暮し居る故にいふ。明治時代の諺。

蟻穴を出でゝ多く行きかふ時は必ず大風吹く。
蟻蛭より蟻の多く出でて、往來頻繁なるは大風の前兆なりといふこと。

蟻穴を塞ぐ時は大雨の去るし。
蟻が其の蛭穴を塞ぐは大雨降るの前兆なりといふ。

有るに繼子なし。
有福の家には繼子の苦情なしとの義。

あわて者半人足。
あわて者は人足としても一人の資格なしといふこと。

い

遊間の公子。
富貴にして、衣食に憂なき人の、優遊として、働くことなきをいふ。

右手圓を畫く左手方を畫く。
一度に兩事は出來ぬを見るべし。

有智無智三十里。
智者と愚者との差甚しきをいふ。「語林」「二人共に一碑文を讀む、智者直に解す、愚者は行くこと三十里にして解せりと」

いかけ屋の天秤棒。
出過ぎたものをいふ喩。

如何樣物。
眞僞如何はしきものをいふ。東京の諺に、僞物を賣りて、如何にも眞物らしく、推しつくるを、いかさま物を賣るといふなり。

烏賊にも章魚には手は八つ。
應答の調に、如何にも然り、といふを洒落てかくいふ。

イキアタリバッタリズム。
往き當りばったり(前に出づ)といふを英語のナショナリズム、とか、ソシアリズムとかいふ語形に擬したるなり。

活鯉。
世の無常にして、有爲轉變の迅速なるをいふ。古歌に「水舟に浮きてひれふるいけ鯉の、命まつまも忙しなの世や」いけすの鯉とは、鯉を活し飼にして、樽とか、籠とか、堀とかに、貯へ置きて、料理する時に取り出すをいふ。

諍果てゝの契。
一旦諍ひたる後に、却つて親密なる交誼を結ぶをいふ。

石子詰にする。
人をいぢめて、苦しき思をさすることをいふ。石子詰とは中古にありし刑にして、大小の石をもて、人を生きながら埋めて殺すをいふ。

石の上の住居。
都會の生活の忙がしくて、何事も田舍の如く優長に構ふること能はざるをいふ。落ち着いて安穩に住居する能はざる義。

急がば高火。
急いで物を煮る時は、火を高く燃やせと云ふこと、轉じて急げば廻れといふ意に用ふ。

板倉殿の冷炬燵。

冷炬燒とは火なきをいふ。即ち非なしといふ謎にて火なしと、非なしとを通はせたるなり。是れは德川時代に板倉周防守が、政事を執るに、一生非なかりしより。出でたる俚諺なり。「五元集」「周防殿は才ある人にて、政事を行はるゝに、一生非なし、ひなきをめでて板倉殿と申とかや」

鼬多くあつまりてなくは其家内に不祥ある徵。

俗說。

鼬なき間の貂誇。

己れより强大なる者の無き間に誇ることをいふ。烏なき里の蝙蝠(トの部)といふが如し。「源平盛衰記」「十郎藏人こそいたちなき間のてんぼこりとやら」

鼬容貌よし猫の顏杓子。

其美魂を彼是品評する迄もなし、惡しきことは固より相場が定まり居て、見るに足らずとの意。鼬は至つて顏の醜きものなるを、反對にみめよしと嘲りいへるなり、猫の顏は杓子の如くにて是亦醜き方なり。

痛い上に鹽を塗る。

痛い上の針に同じ。

一引二運三容貌。

德川時代大奥の女中に行はれし諺にして、第一は後援者の自分を引いて奥るゝものあること、第二は運のよきこと、第三は容貌の美なることの義。

一姫二太郎。

最初に女子を生み二番目に男子を生むがよしとの義。

一文字は無文字の師。

目に一丁字なきものは、一字にても知れる者を師とするの義。

一日の長。

一日だけ他より多く學べりとか、經驗せりとか、年齡が多しとか、僅に優る所ありといふほどの意。論語に孔子顏回に謂あつて、吾一日閒に長ずるを以て、吾を憚るなかれとあるが其出處ならんといふ說あれども如何にや。

一字の師。

一字たりとも、自己の教へられたるものを師とするをいふ。「五代補」に鄭谷といふ人の許に、齊己といふ人、訪ひ來つて、其作る所の早梅の詩を出示せり。其詩に曰く、前村深雪裏、昨夜數枝開。と鄭谷直に筆を取り、數枝にては早梅にあらずとて、一枝開と改めたり、齊己覺えず拜したり、是より文士皆谷を以て一字の師となす」とあり。

苛り苛り嫁にかゝる。

姑が嫁を苛りつゝ終に嫁の世話になるとの義。

一刻千金。

時間の貴きをいふ。語句は蘇東坡の詩に春宵一刻價千金。花有二清香一月有レ陰。歌管樓臺人寂寂鞦韆院落夜沈沈。とある起句の四字を取り意は西洋の諺に時は金なり time is many とあるを取れるならん。

一心萬能。

色々の藝能も皆一箇の心より生むとの義。

一將功成りて萬骨枯る。

國家に戰爭を開くことありて、一人の大將功名を立つる曉には、一方に多くの兵士は討死して屍を戰場に晒すい悲慘ありとの義。是れは曹松の澤國江山入二戰圖一。生民何計樂二樵漁一。憑君莫レ話封侯事。一將功成萬骨枯。といふ詩の結句より出たる諺なり。

一寸斬らるゝも二寸斬らるゝも同じ。

一寸斬らるゝと二寸斬らるゝと、僅に多少の相違ありと雖ども、其斬られたるは等しく斬られたるなりとのことにて、彼是多少の相違こそあれ、其害を被る所は等しとの義。

一錢に二つ賣程の涙。

大なる涙をこぼすこと。

一張羅を着る。

一襲よりなき最上の美服を着るといふ意。一張羅とは一張の奇羅といふ義。

一頭の鯨能く七浦の漁夫を潤す。

一頭の鯨を漁すれば非常に利潤あるをいふ。

何時も正月のやう。

苦しき思なくして常に暢氣(氣の煩らひなく伸び伸び

したる意なる人のことをいふ、正月は一般に人の氣の暢氣なる時なり。「他我身の上」「山里やいつも正月門の松」

犬草を嚙めば晴天。

犬が草を嚙むときには天氣は晴と知るべしとの義。

犬殺し。

醜惡なる容貌をいふ。新平民などの野犬を撲殺するを業とするもの、容貌惡しきよりいふ。

犬土の高き所に上りて眠るは雨降る徵。

解に及ばず。

犬の糞と愛宕樣は高い所にある。

犬は地の少し高まりし所に糞をなし、愛宕神は高き所に祀られたる故にかくいふ。

犬の齒に蚤あたり。

犬が蚤をかまんとして齒が食違ひ居りてうまく嚙めざるが通例なるに、偶ま其齒にあたる蚤ありとなり。次の諺參照すべし。

犬の齒の蚤。

物の食ひ違ひてうまく行かぬことをいふ。犬が齒にて蚤をかまんとしても食ひ違ひてうまく嚙めず故に喩とす。すべて食肉獸は上齒と下齒と食ひ違ひ居るものなり。

乾の夕立と伯母御の牡丹餅來ぬ事はない。

解に及ばず。

曰く言ひ難し。

口に出して容易に語りがたしとの義。

意馬心猿。

煩惱情慾の發生を禁制しがたきをいふ。「心地觀經」「心如二猿猴一遊二五欲之樹一。暫不レ住。」「梵網經」「心馬馳二惡道一放逸而難二禁制一。」「趙州錄」「心猿罷レ跳、意馬休レ馳」

衣鉢を傳ふ。

學藝職業などの奧儀を傳授するをいふ。僧侶の衣鉢を傳ふより出でたるなり。

祝ひ事は延ばすがよい。

慶事ありて祝宴を開く如きは日を延すがよしとなり。

茨の中にも三年の辛抱。

困難辛苦の中にも三年忍耐すれば遂に善き事ありとの義。茨の中とは苦しき中といふことなり。

言ひ出しッ屁。

多人數の中にて放屁したる者の誰人なるか判然せざる時、先づ臭しと言ひ出したるものが卽ち放屁したるものなりとの義。轉じて人の醜行など風說を立て初めたる人が、却つて自ら醜行の本人なりといふ義に用ふ。

言ひ出し兵衞。

言ひ出し屁より轉訛したるものなり。

家の風を興す。

家名を揚ぐることをいふ。管公の歌に「久方の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしかな」。

家の建賣は釘代。

家を建て、、之を賣却すれば僅に釘代程といふことにて價の安きものなりとの義。

家柄より芋柄。

家柄のよきとて、何の役にも立たず、寧ろ芋柄の方が役に立つとて、家柄を誇るものを嘲罵せるなり。

臨終の念佛誰も唱へる。

日頃不信心なりしものも、死際には誰にても念佛を唱ふるが常なりとの義、臨終の際念佛を唱ふるは誰にてもする然しそれにては無效なれば日頃より信心を持つべしとの意を含む。

殷鑑遠からず。

我身の規範とすべき戒めの標的が近に在りといふ義。「詩經」「殷鑑不レ遠。在二夏後世一。」是れは殷は直ぐ前代の夏の國の亡びたるに鑑みて、亡びぬやうに十分警戒すべしとの義なり。それより出でたる諺なり。

因果を含める。

其人に對して多少氣の毒の感ある如き吉事ならぬことを說き示すをいふ、能く原因結果を說き諭すといふ意に出づ。「諺草」「華嚴經云、欲レ果知レ因。譬如二蓮花一。方二其吐レ花。而果具二蓮中一。」惺窩の說に、「木の根本あるものは、必ず其實を結ぶ、彼れに因りて此れに來るの謂なり。たとへば、こゝに人ありて、昨日人の物を盜みて、今日害せらるゝ如き、昨日はこれ因にして、今日は卽果なり」。

隱公左傳切壺源氏。
事の半途止めて終までつゞかざるをいふ。左傳を讀み初めて隱公の章にて止め、源氏物語を讀み初めて切壺の卷にて止むるをいふ。

いんちきをする。
不正なる所行あるをいふ。例へば賭博の際對手の眼を胡覓かして、不正なることをするをいんちきをするといふ。

芋壺。
人の齒の脱けたるを形容していふ。

芋を洗ふやう。
多人數集りて雜閙せる形容。

いやな男の深切よりもすいた男の無理がよい。
女子が已れの愛好せざる男子より深切にせらるゝが嬉しからで、寧ろ已れの愛する男子より無理の取扱を受くるが嬉しとなり。

日沒に其の色臙脂の如く紅なるは雨なく風吹く徵なり。
夕日の色紅なれば風吹く前徵との義。

入船によい風は出船にわるい。
一方によければ一方にわるしとの義。

色消をいふ。
美人などの顏に似合はぬあしき言語を發することをいふ、惡しき言葉の爲に其美を損ふといふ義。

色を見て聽く。
人の顏色を見て其の善惡を察するをいふ。

鰯の不漁な年は季候が惡い。
「天時占候」に出づ。

う

烏合の衆。
諸處より寄り集まりたる衆にて、統一のなき團體のことをいふ。「文選」「新起之冠烏合之衆。非二吳蜀之敵也一。」

鶯の巢は梅の半にあり。
むすめといふこと、す字がむとめとの間にあればむすめとなるなり。

請負工事なら後から掘る。
目の凹みたるものをいふ。眼の球を掘り出す工事を請け負はゞ、頭の後の方から掘るが却つて眼球に早く達すと惡口していふなり。

鬱金の雷。
嫌ひといふ謎。嫌ひと黃雷とかけたる洒落なり。鬱金とは鬱金草の根より採れる染料にて染めたる色(黃)なり。

兎の字を頂戴する。
免職せられたることをいふ、免の字と兎の字と相似たるを以ていふ。

兎の耳。
他人の事をよく聞きつくる者をいふ。新聞記者の事を兎耳子といふ。

牛の喉から引き出したやう。
衣類反物等の黑く垢つきたるをいふ。

牛は願によつて鼻木さす。
牛が鼻木を通さるゝも、みな自ら之を求めたるとの義。牛にして若し人を衝くことなく、力を恃むことなくば、此苦痛を忍ぶことなかるべきに、其の力を誇り角を振り立つる故に、此厄に遭へるなりといふほどの意なり。

後に柱前に酒。
後には背をもたせかくる柱あり、前には飲むべき酒がありて、至極滿足得意の心持なるをいふ。

後辨天前不動。
後千兩前一文に同じ辨天は美しく不動は醜し。

後辨天前板額。
後千兩前一文に同じ。辨天は美しく板額は醜女なりき。

うそ昏い事をする。
正しからざる所行あるをいふ。明かなる行の反對にて明かなる所にて爲すこと能はず、昏き所に於て爲さゞるべからざるをいふ。うそ昏しは烏兎昏の誤なりといふ「諺草」「烏は日なり、兎は月なり。日入りて月出で來るを烏兎昏しといふ。うそぐらしは誤なり。」
按ずるに氣味惡きことをうそ氣味惡いといひ、穢きこ

と穢いといふ如く卑に昏い事をするといふをうそといふ接頭語を添へたる迄ならむ。

鶯の雄は晴を呼び雌は雨を呼ぶ。

鶯の雄鳴くときは天氣晴れ、雌鳴くときは雨降るとなり。

虚言は後から剝げる。

虚言は後に發覺するに至るものなりとの義。

歌は碁の如く詩は將棋の如し。

歌は學び易くして達しがたく、詩は學びがたくして達し易しとの義。碁は石の配置法を覺ゆるは易く、上手になりがたきが如く歌は單に假名三十一文字を並ぶるのみにて、形をなし易けれど眞に人をして咀嚼せしむるものを作るは難し。將棋は駒毎に使用法あり、甚だ面倒にして學びがたけれど、上手になり易き如く詩は組字平仄等種々の規則ありて、初は甚だ困難に見ゆれど、學べば上達すること早し。故にかくいふなり。

内から火を出す。

外部より出でたるにあらずして、内部より事を惹き起すをいふ。

内の鯛より隣の鰯。

餘所の花美しに同じ、我物よりは他人の物がよく見ゆとなり。

内の前で瘠狗。

家に在りて威張れども、外に出でゝは一向意氣地のなきをいふ。恰も瘠狗が我が主家の門前にあるときのみ、高く吠えて強きやうなれども、外に出でゝは弱きが如しとなり。

訴へなければ理せず。

國家は權利の保護を請ふものなければ審理して其權利を保護することなしとの義。

うつも撫でるも親の恩。

子を譴責するも寵撫するも等しく親の愛情より出づとなり。

鶉の床。

草深き野邊に假寢するをいふ。鶉は草深き所に巣ふ故にいふ。

鰻に荷鞍。

ヌラクラト滑つて要領を得ざる喩。

兎の毛で突いたほど。

傷などの微小なるをいふ。兎の毛の末の條參照。

卯の刻の酒は藥になる。

この卯の刻とは今の午前六時を指す、早朝に酒を飲むは衛生に利ありとの義。「白氏文集」「佛法讃二醍醐一。仙方誇二沈麗一。未如卯時酒。神速功力倍。」

鵜の鳥の尻拔。

健忘性の人をいふ。呑み込んでも直ぐ尻へ拔くるといふ意。

于ばね干びき。

于と干と字形相似て相違あり、于は其下撥れて書き、干は引きたるまゝに書くべしとなり。

乳母のあなばち。

求めても得べからざることをいふ。乳母は一旦子を產みしもの故かくいふ。

乳母の乳上り。

既に使ひ道のなきことを云ふ。上るとは無くなることをいふ、乳母にして乳上るに至れば其の用なし。

卯腹辰腿寅背中。

灸點の拘忌。

上見れば榜示なし。

人間の貴賤貧富さまゞの階級ありて殆ど其の際限なきをいふ。榜示とは水中に杭をたてゝ、こゝよりは外へ出づるなかれといふ限界標にするなり。或は水泳場にて、こゝまで來よといふ標となすをいふ。故に慾心に際限なきを欲に榜示なしといふなり。歌に「上見れば上見れほしこれほしほしだらけ、下の里見よほしのけもなし。」

馬の糞。

婦人の束髮をいふ。

熟瓜が熟柿を哂ふ。

目糞が鼻糞を哂ふに同じ。

海川に蓋は出來ぬ。

人は海や川に何時投身して溺死するかも知られずとの義。

卯味噌寅酒。

卯の日に味噌を造り、寅の日に酒を釀すを忌む。或は

又兎は月中に餅を搗き、寅は竹と縁あり、酒は笹と縁あれば此兩日は忌むべきに非ずといふもあれど普通は之を忌む。

海の物とも川の物ともつかぬ。

前途の如何になりゆくか不明なるをいふ。

雲烟過眼。

一時の快を取ることにて、其の樂みに長く執著せざることをいふ。又物事を深く留意せずして見過す意にもいふ。

雲州の旦那。

種(金のこと)のなき男といふ謎。雲州蜜柑には種なき故にいふなり。

雲泥萬里。

相遠の甚しきをいふ。「諺草」「雲は天なり、泥は地なり、天地懸隔といふ事なり。」

雲天萬天。

雲泥萬里の訛なりといふ。

運の矢が空から落つる。

運は天にありて、人力の如何ともすること能はざるものなれども、人事を盡せば天命自ら到るとの義か。

運賦天賦。

萬事みな運命次第にて、没りに人力を用ひて天命を動かさんとすとも能はずとの義。

有紋無紋の能。

「能樂抄物」「有紋は一々正則の能にして、男女老鬼三立四居の法則より、始めて行歩し、動作悉く法則にかなふ能をいふ。無紋とは古代の名人などがたまには折にふれ興に乘じたる仕舞なり、法則に自ら悖らぬ振舞あるをいふ。

埋木の花。

事の成らざることをいふ喩。朽ち果てゝ埋れたる木に花咲くことなし、源三位頼政の歌に「埋木の花さくこともなかりしに身のなるはてぞ哀れなりける。」

魚飛んで水の上に踊る時は必ず風雨の徵。

「天時占候」に出づ。

魚の釜に遊ぶが如し。

禍の至ること眼前に在りといふ意。自ら危地に臨むをいふ。

魚の目に水見えず。

己れが接近せる事に氣付かぬものとの義。

魚水を泳ぐに口を上に向けるは雨の徵。

「天時占候」に出づ。

え

榮華の夢。

榮華の極に達しても、畢竟は一場の夢の如しとの意。

依正二報。

依報正報といふことにて、正は本、依は副といふが如し、正報とは正しく受けし果報の義、人物ともに形式を具有する有情の色身なり。依報は正報の果を得て其の依る所を得たるをいふ。人にては衣宅、物にては、鳥は木に、魚は水を得る如きをいふ。

越前男に加賀女。

越前は男がよく加賀は女がよしとなり。

江藤新平の二の舞。

自己の定めたる規則を自から犯して罰せられたるをいふ。江藤新平は明治維新の後、法律を制定するに力を盡し、而して後自ら亂を起し、其の法律に由りて死刑に處せられたるなり。

海老の糞。

頭へ上りて直に倦むといふ事。海老の糞は頭にあり。

鴛鴦の契。

夫婦の契睦しきをいふ。鴛鴦は一雌一雄常に樹枝に棲み雌死すれば雄鳥他の雌鳥と共に棲まずといふ。

椽大の筆を揮ふ。

巧妙の文を作るをいふ。晉の王詢大筆椽の如きものを人より貰ひたりと夢みて、後俄に帝崩じ、哀冊監議皆詢が草せしよりいふ。

椽の下の小豆。

世に時めくこともなく、轗軻沈淪空しく一世を終るをいふ。椽の下に生ずる小豆は、日光を受けざるを以て、繁茂することなし、故に喩とす。

お

老妻のしれ笑ひ。

老婦の情ありげに笑ふをいふ。仕方のなき事にいふ喩。「犬子集」「しほのなきにぞあきれはてにける。といふ句に、老妻の思はれ顔のふれ笑ひ。」

老の身は今日か明日か。

老體にては、今日か明日かの中にも、何時死するかも知れずとの義。

おいちよ、かぶすりや、九一がつけめ、人の嬶すりや子がつけめ。

おいちよ、かぶ、賭博の名なり。得たるカルタの數九なれば勝なり。一より九まで順次に數の多き方が勝ち目あるものにて、十に至れば最下となるなり。されど九とつん(一の事)とありたる時(九の札と一の札と二枚合へるとき)は、十にも數ふべく、又一は消滅して九ともなる權利あるなり。

御家がら〳〵。

家柄のよしとて誇るを罵りていふ。お家空空の意。柄と空とをかけたる惡洒落なり。

お飾りの下を餘計くゝつて居る。

お飾りとは正月のお飾りのことなり。諺の意は年が多く閲歷ふたるをいふ。

お粥たきやこがす。

何一つ爲すこと能はざる無能の女を罵りていふ。粥を炊かすれば焦すとなり。

沖を漕いである。

多く世故を經たる人をいふ。浮世の風波を漕ぎたる人の意。

奢は三歳の費。

奢侈は三歳間の貯蓄を一時に毀消すとの義。

おこを折る。

小商人の商法出來ぬやうに損したるをいふ。

恐れ入り谷の鬼子母神。

恐れ入るといふを、入谷の鬼子母神とかけていへる秀句なり。

恐れちやんちき茶の袴。

女學生の擧動の亂暴なるに恐れ入るとの意。茶の袴とは女學生の用ふる海老茶袴のことにて、卽ち女學生のことをいふなり。

おたふくの火あぶり。

話しに成らず(爲火にならず)との隠語。

お溜り小法師がない。

堪へられざるをいふ。

落つる。

軍隊内の語。駈足をなしつゝある時に、列を離れて後るゝことをいふ。又禽獸虫魚の類の死することを落つるといふ。

おつけで顔洗へ。

おつけとは汁のことをいふ。目を醒ませと罵る語なり。味噌汁で顔洗へともいふ。

鬼に膽取られたやう。

甚だしく氣慮れしたるをいふ。「宇治拾遺」袴垂保昌の條「このけしき、今はにぐともよもにがさじと覺えければ鬼にきも取られたるやうにて俱に行く云々。」

鬼に瘤とられる〳〵。

他人を羨み、其の眞似をなして失敗すること。「宇治拾遺物語」「むかし或人山路に行き暮れて、側なる朽樹に一夜をあかせり。夜半ばかりに、鬼のやうなる人、大勢集り來れり。かの人之れを見て、甚おそろしき事におもひけり。しばらくありて、鬼ども酒宴をはじめて、うたひまふ。かの人おもしろくおもひて、おそろしき事を打ち忘れ、酒宴の座にまじはりて、鬼とともに、舞ひうたふ。夜もやう〳〵明がたになりければ、鬼ども、かの人に向て曰、なんぢかされてこゝに來り遊ぶべし、約束をたがゆる事なかれとて、かの人の額に有ける瘤を、賞に取りてさりぬ。かの人よろこび家に歸り、しか〳〵の事をはなしければ、人々聞いて、年久しくありし瘤をとられし事、仕合なりとよろこびあへり。かの人の隣に瘤ある人この事を聞きて、うらやましくおもひ、くだんの朽木の中をたづねゆき、一夜をあかしければ、あんの如く夜半ばかりに、又鬼ども來り、はじめの如く酒宴しうたひ舞ける。となりの人その中にまじりてあそびければ、鬼ども見て、よろこびていはく、汝約束をたがへずして來れり、定めて賞物

を取り返さむためなるべし。今汝にかへすぞとて、ふところより擲を取り出し、隣の人の顔になげ付けければ、擲の上に擲をかさねて、なくなく家に歸りけるとぞ。」

「諺草」「是れ誠に世の人の富貴利達をうらやみ、其身にうまれ付かぬ幸を求むるもの〻戒となるべし。誠に此事ありとおもへるは、凝人の面前に夢を說くなり。

帶を綬うす。

「諺草」「俗に、何の氣遣もなきを、帶を綬うすと云、此事漢書匈奴傳に出でたり。」

音頭を取る。

人に先ちて首唱者となること。盆踊の時一人音頭をとりて、衆人これを囃すより出でたるなり。

御坊も燒賃。

如何なる卑しき事も、金錢の爲には爲すといふ義。御坊は屍を燒くを業とする人。

陰陽師と辻風には遇はぬが秘密。

陰陽師とは賣卜者のことをいふ、賣卜者に逢へば八卦を見たくなり、八卦を見れば心中の秘密を、人に語らるゝこと、恰も辻風に逢へば、衣服の裾まくれて、醜見ゆる如しとの意。

陰陽師の門に蓬絶えず。

「梅園叢書」「諺にも陰陽師の門に蓬絶えずとて、餘り強く物を忌めば、草とる日とてもなくなり侍る。」

恩をうけて恩を知らぬは畜生の如し。

恩をうけて恩を知らぬは鬼畜の如しに同じ。

面隱する。

袖屏風の如し。女の耻らひて、袖もて面を隱すをいふ。「新撰六帖」「晉妹子がまだ朝顏やつゝむらむ髮ふりあげて面隱しする。」

面嫌する。

他人に面を見するを嫌ふこと。

思ひ草葉末に結ぶ。

相思の情切なるも、永く留まらざるをいふ。「金葉集」「懷中納言俊忠が來て留らずといふ戀歌に「思ひ草葉末に結ぶ白露のたまくきては手にもとまらず。」

思ひを包むは罪深し。

心に思ひ居ることは、隱意なくいふがよし、言へば何事もなきを、言はぬときは人に色々に疑念など抱かせ、

即深きものなりとの意。

思ふこと叶へば禿へ毛が生ゆる。

何事でも、自分の思ふやうに、ゆくものでなしとの意。若し思ふ通りに叶ふものならば、禿に毛の生ゆることすら出來得べき事なるが、さて禿に毛は生えずとなり。

思ふ子に旅させよ。

いい子に旅させよ（カの部）に出づ。

親苦子樂孫乞食。

親が苦をする子が樂をする孫が乞食するとなり。

親に似た龜の子。

子の能く親に肖似するをいふ。

親の腐つたのと味噌の腐つたのは直しやうがない。

味噌の腐敗したるは直すこと能はざるが如く、よからぬ親し容易に直るべきものならずとの義。

親い異見と冷酒は後にきく。

親の異見（教訓說諭）は、其の時にはさまでに思はれども、後に至りて得心することあり。猶冷酒を飲みて、其の時には醉はぬも後に至りて醉ふこと強きが如し、故に孰れも後にきくといふなり。

親の惡いのと味噌の腐つたのは直しやうがない。

親の腐つたのと味噌の腐つたのは直しやうがないに同じ。

か

骸骨を乞ふ。

辭職すること。「史記」「願乞二骸骨一歸二卒伍一。」

眦の怨。

一寸睨まれたるほどの怨。

蓋世の氣。

世を蓋ふほどの勇氣。「史記」「力拔レ山。氣蓋レ世。」

カイザルの物はカイザルに返せ。

稅金を納めよといふこと。昔羅馬帝カイザル猶太を征服したる後、或ものキリストを試みんとして、羅馬政府に納稅すべきや否やを問へる時、いはれたる語なり。

カイザル式。

口緊の兩端の上方に捻り上げたるをいふ。獨逸皇帝の鬚に似たりとの意。

偕老同穴の契

夫婦相親しみて能く和することをいふ。「詩草」「詩經擊鼓篇云。死生契濶。與子成說。執子之手。與子偕老。」又君子偕老。朱傳にいへるは、君子は夫なり、偕老は共に生き共に死ぬるをいふ。女子の道、一たび身を以て夫に事る時は、これと同じく生き、同く死ぬべし、故に夫死しては婦人自稱して、未亡人といふ。再他人にまみゆべき理なし、其を偕老の契といふなり。老は生死の界なる故、偕老といへば、生死を偕にするの義なり。詩經大車篇、穀則異室。死則同穴。朱傳にいへるは、穴は壙也、これは男女淫奔の志遂げず相ともにかたらひちかふ詩なり。生る時は奔行て室家を同じうせずとも、死なば必合せ葬られて、壙を同じうせんとなり。前の偕老は貞女の道なり、此同穴は淫奔の詩なり、諺に偕老同穴とつくるは相應せず。「白氏長慶集」婦人苦の詩に「妾身重二同穴一。君意輕二偕老一。」とあり、かゝる所より遂に、偕老同穴と續くるに至りしものならむ。

孝行で賣られ不孝に請け出され。

親孝行の爲に賣られて遊女となりしものが親不幸の者に落籍せらるとなり。

香餌の下に必ず死魚あり。

利慾の餌を投ずれば、必ず之を得んと欲して、其釣にかゝるものなりとの義。「三略」軍讖「香餌之下。必有二死魚一。重賞之下。必有二勇夫一。」

好事魔障多し。

よき事には故障の生じ易きをいふ。

好事魔を出だす。

よき事と思ひしものが却つて惡しきことに轉じ易きをいふ。

剛者に矢たゝず。

「世話藍」「能く戰ふものは死せずと同じ意にて、剛勇の士は失おもてに立ちて、奮鬪するも矢に中ることなし。」

好事を行ひて前程を問ふなかれ。

善き事を爲すに、將來の報酬を期するなかれとの義。

蝙蝠も鳥の數。

蝙蝠は鳥類にはあらざれども羽翅ありて飛ぶこと鳥の如し、故にかくいふ。つまらぬものが、よきものゝむれにあること、或は之れに倣ふことなどにいふ。

蝙蝠も鳥の眞似。

つまらぬものが、よきものに倣うて其の眞似を爲すをいふ。前の諺參照すべし。

高野へ行く。

雲隱に行くをいふ。昔高野には落髮の人のみ住む所なりし故、かみを落しに行くとの義に取るか。

亢龍の悔。

高き地位に上りつむれば再び下るとの義。「易經」「亢龍有悔。」

蛟龍水を得。

英才の人、機運に乘じて、大に雄飛するを得るをいふ。

號令汗の如し。

一たび下したる號令は變改すべからず。綸言汗の如し(りの部)に同じ。

蚊が春けば雨が降る。

蚊が多く群聚して、空中に喜くやうに飛びかふときは其翌日雨降るとなり。「葛原詩話」郭璞曰、蟻飛磯則天風吹、春則雨降。」

嫗大明神。

亭主弱く、妻の強さをいふ。

加賀邸の盲人長屋。

加賀前田侯の長屋は窓を開かざりし故にかくいふ。

柿色の仕着せを被る。

囚人となるをいふ。仕着せとは、奉公人に給與する衣類なり。監獄署にて、罪人に柿色の衣服を着せしむるをもて、柿色の仕着せとはいふなり。

牡蠣が鼻垂を笑ふ。

牡蠣も鼻垂も何れも醜きものなり、目鼠が鼠糞を哂ふに同じ。身の程を知らで人をわらふこと。

かき餅とやき餅とやくほどよい。

やき餅とかき餅と燒くほどよい(やの部)に出づ。

かき餅燒くともやきもち燒くな。

妬心を起すなかれと戒めたるなり。やき餅とかき餅とやくほどよい(やの部)參照。

學者と役者と貧乏。

學者と役者とに富めるもの少くして多くは皆貧なり故にいふ。

影の樣に痩する。

痩せ衰ふる形容。「夫木集」「月に添へて姿ぞ影になりにける、やせの里なるいもを戀ふとて。」

駈る駒にも鞭。

走る馬にも鞭(ハの部)に同じ。「吾吟我集」「強き方に助言いひぬる將棊こそ駈る駒にも鞭と知らるれ。」

駈るも引くも折による。

戰場にて、敵を追ひかけ、或は進み、或は退くも、すべて時機に乘ずるといふが本にて、商人がかけひきするなどいふに至れり。「吾吟我集」「聞く人も無しとてさゝし琴の緒や、かくるもひくも折にこそよれ。」

陽炎、電、水の月。

恍として摸捉すべからざる譬。

笠の土臺が飛ぶ。

首が飛といふこと。笠の土臺とは首のことをいふ。

笠井鳥に掛塚烏。

笠井掛塚共に遠州に在り、其地方の人氣險惡なるよりかくいふなり。

瘡もさはらねば傳染らぬ。

瘡も接觸せざれば傳染せざる如く、何事にても手を出さぬことには禍害を招くことなしとの義。

鹿島の言觸のやう。

口やかましく告げありく事。常陸鹿島の明神より、毎年の春、其年の穀物豐凶を觸ありきしなり。轉じて無益なる言葉を吐くものをいふ。「永代藏」「總じて產業の道、拵ぐに追付貧乏なしと云ふ觸がまわり」云々。

頭隱して尻かくさず。

あたまかくして尻かくさずに出づ。「小町踊」「頭かくして尻かくさぬ螢かな。」

貸し下され。

物を借りて返すことなきをいふ。貸せといふのでなくて、眞に下されといふことだといふ意。

河清を俟つ。

望なき事を俟つをいふ。「左傳」「俟二河清一人壽幾何。」河は支那の黃河にして源流に黃土あり清む時なし。

稼ぐに貧乏追ひ付かず。

極貧にして稼ぎ甲斐のなきをいふ。稼ぐに追ひ付く貧乏なしの反對なり。

風に順ひて呼ぶ。

順境にありて事を成すをいふ。「荀子」「順レ風呼、非二聲加一疾。」「聞者彰也。」

かたいものは箸ばかり。

辛苦を嘗めざる人をいふ。堅いものでは、箸より外に提げた事なしとの意。

敵の家でも口を濡せ。

人の欵待を受くべきものゝとの義。又利の在る所は仇敵をも辭せずとの意にもいふ。

形は生めども心を生まず。

形體を生みたれども心は親の遺傳にあらずとの義。

肩のたしにも裾のたしにもならぬ。

何の用にもたゝぬといふことなり。

片目で天國行。

惡事をなしたる時速に悔改めざれば遂に身を亡ぼすとの義。「新約全書」馬太傳「右の眼汝を罪に陷さば抉出して之を棄てよ、そは五體の一を失ふは全身を地獄に投入れらるゝよりは勝れり。」

鍛冶屋の歲暮。

困せたる人をいふ。細きこと火箸の如しといふ意。鍛冶屋は歲暮として火箸を贈る者多き故なり。

脚氣の妙藥。

成功の見込なきをいふ。そんな事が出來たら脚氣の妙藥だといふなり。脚氣の妙藥はなきものなればなり。

癪病の棒打。

復讐の意。

がつたり三兩。

がつたりとは轉居の騷ぎなどをいふ。一寸轉居するにも直ぐ三兩位は費ゆとなり。

勝手な熱を吹く。

得手勝手なる議論を吐くをいふ。頭部に熱ありと云ふをもて之を冷しやれば足部に熱ありと云ひ、足部を冷せば又た頭部に熱ありと云ふが如し。

禍を被て玉を懷にす。

外貌を飾らずして精神を研く事。「老子」「知レ我者稀即我者貴。以是聖人被レ褐懷レ玉。」

河童の川流れ。

己れの能とする所によつて失敗を取りたる喩。河童は游泳の巧なるものなり。

勝てば官軍負くれば賊軍。

勢ある所に名譽の集るをいふ。兵を起す者、勝たば謀叛の軍も官軍と稱せられ、負くれば忠義の軍も賊名を負ふとの義。

蟹の念佛。

吹く事。蟹を捕へて水より出し置けば、口邊泡を吹き、ぶつ〳〵言ふ故なり。

金持身が大事。

千金の子は堂に垂れず(セの部)に同じ。

蚊の涙。

極めて少きをいふ。「蚊の鳴く涙の中の中島に、眞砂拾ひて粉にはたくなり。」

可愛可愛は憎いの裏。

可愛々々といふは、憎い極の反詞なりと、知るべしといふ意。

可愛がられて身の迫り。

愛せられて却つて身を窮しむるに至るをいふ。

可愛事を憎しといふ。

可愛々々は憎いのうらといふ如く、憎いといふは可愛極の反詞なりと知るべしといふ意。「乘穏錄」「世俗以レ可レ愛。爲レ可レ憎。以レ無レ賴爲レ賴。以二病差一爲レ愈。」

可愛子には旅をさせよ。

旅は憂いものつらいもの、といふ諺の如く、旅中の艱苦は一通りにあらざれば、愛子をして之れを嘗めしめて、其精神を訓練せよとなり。「諺草」「人の子たるもの、家にのみ在りて、父母の愛育を恃んで、世間の人情の險惡なる事を知らざれば、身を立つる事かたし。故に愛寵深き子ほど、旅に出して、鋭氣を挫けといふ諺なり、尤も故ある詞なり。程子曰。在レ旅之時。謙降柔和。乃可二自保一。而過剛自高。失二其所一レ宜レ安矣。」「大学集」「いと愛しき子も旅させよ秋の鳥。」

可愛子は打て。

可愛子は棒で育てよ。

可愛子は杖で育てよに同じ。

人は其の子の愛に溺るゝことなく、愛子ほど猶殿重に教訓を加へて、養育を忽にすることなかれとの意。打てとか、棒で育てよとかいふは、愛に溺れずして、殿格に取扱ふべしとの意なり。

可愛さ餘りて憎さが百倍。

愛情の甚しきものは、之れが反動として、還た之れを憎むこと非常なるものなり。世に愛情の極遂に相殺害するに至ることあり、全く此の諺の意なり。

かはらけは隣七軒に祟る。

かはらけとは女の陰毛なきをいふ。陰毛なき女を娶れば隣七軒に祟るといふ意。

蛙殺しの蚯蚓さり。

百姓の事。百姓は田畑を耘る時よく過つて蛙を殺し蚯蚓を切るより云ふ。

壁に塗られた田螺。

途に世に出づる能はずして榮ゆることなき喩。田螺若し土に混じ居りて壁に塗り附けらるれば終に死滅を免るゝ能はず故に事物の絶望なると壁に塗られた田螺といひ絶望ならずして前途に希望の存するときは壁に塗られた田螺ではあるまいしといふなり。

顔に紅葉を散らす。

心に恥づるとき、或は怒るときなど、覺えず顔を赤らむることあるをいふ。「世中花首」「世の中に朝夕腹をたつた山もみぢな顔に、さのみちらしそ。」「雪女物語」「夫と立ち、やすらひて居る有樣を、はずかしとや思ひけむ、顔に紅葉をちらして。」

かぼちや式部。

女學生の容貌醜なるをいふ。海老茶式部を更に轉じて言へるなり。

龜の小便。

少しづゝ出すといふ謎。龜の小便は極めて些少なり故にいふ。

剃刀。

被腕なるをいふ。よくきれるの意。陸奥宗光は剃刀大臣といはれたり。

剃刀の刄を渡る。

刀の刃を渡る（カの部）に同じ。

汗牛充棟。

書物の多き事。柳子厚が陸文通の書の多き事、處けば棟に充ち出せば牛に汗するといひしに出づ。

汗馬の勞。

軍人の戰ふ勞をいふ。「史記」「蕭河嘗未有汗馬之勞。」

看板内向。

商品を他に賣却するよりは寧ろ自家に於て之れを費消すること多きをいふ。

漢法醫。

算術を好まざる者をいふ。三歸來（算嫌ひ）の意。漢法醫は三歸來の根を藥に用ふる故なり。

韓盧を驅りて蹇兎を博つ如し。

容易なる事。史記范雎傳に此語あり、韓に盧といふ甚だ強き黑犬あり、此の犬をして兎を打たしむる容易の事なればかく云ふ。

からくりがとまる。

事業の中止する事。機關の用をなさぬやうになりたる意。

からけつ大明神。

無一物なる事。財布の空なるを云ふ。

芥子種の信仰。

堅き信仰をいふ。「新約聖書」「芥子種の信仰あらば此山に命じて彼の海に入れと云ふも得べし。」

烏飛ぶとき其翅を重ぬるは雨の去るし。

解に及ばず。

烏に反哺の孝あり。

烏は孝鳥にして、親の養育の恩に報ゆとの義。反哺とは食物を反す義なり。古來の傳說に曰く、親烏が雛を養ふに、餌を其の口に哺まするを、雛烏之れを見て能く記憶し、他日成育したる後、餌を親烏の口に哺ませ反し、其養育の恩に報ゆと。「樵子法訓」「夫孝百行之本。舍レ本而求レ末。吾未レ見二得レ之者一。如得レ之。君子不レ貴矣。烏者猶有二反哺一。況人而無二孝心一。」唐の白樂天が烏の孝鳥なるを憐みて人の孝心なきものを戒めたる慈烏夜啼の詩に曰く「慈烏失二其母一。啞々吐二哀音一。晝夜不二飛去一。經レ年守二故林一。夜々夜半啼。聞者爲沾レ襟。聲中如二告訴一。未レ盡二反哺心一。百鳥豈無レ母。爾獨哀怨深。應二是母慈重。使二爾悲不レ任。昔有二吳起去。母沒喪不レ臨。哀哉如レ此輩。其心不レ如レ禽。慈烏復慈烏。烏中之曾參。」

烏水を浴びる時は必ず雨降る。

解に及ばず。

唐物商は千里一はね。

唐商と貿易を通じて、唐品を商ふものは、一時に巨利を博して、暴富を作ることありとなり。

收穫時。

僧道の好時季といふ事。新約聖書に出づ。

蚊をして山を負はしむ。

身に餘る大任を負はする事。「莊子」の語。

き

杞憂を抱く。

いらぬ心配する事。列子に杞國の人天の崩れ來らん事を心配し、寢食を廢したる記事あるより出でたる諺なり。

開いて吃驚見て吃驚。

非常に珍貴なりと聞いて一び驚き、實際之を見れば案外に惡しきものなるを以て二び驚くをいふ。

牛耳を執る。

人の上に立つ事。「左傳」「諸侯之盟誰執二牛耳一。」

紀州不作に米買ふな。

紀州の凶作年は全國一般に豐作年なり、從つて米價廉下になるを以て米を買ひ置くべからずといふなり。

紀州豐年米喰はず。

紀州の豐作なる年は全國一般に凶作なりとの義。

雉の草がくれ。

あたまかくして尻かくさずに同じ。

貴志の井口女の夜這。

和歌山縣那賀郡貴志といふ地は女の方より夜這に出づとなり。

鬼子母神。

子の多きものをいふ。子供を隱された鬼子母神（遺補コの部）を見よ。

寄生蟲。

他人に依憑して利を收むるものをいふ。

穢い錢儲をして綺麗な生計をする。
勞働を爲し卑賤の職業を爲しても其收入饒にして生計の清きをいふ。

來て見れば聞きしに劣る富士の山。
何事にても實地に見ることは評判に聞くより劣るとの義。

來て見ればさほどにもなし富士の山。
前に同じ。

絹ふるひで篩うたやう。
最も細きをいふ。

箕とつた山は忘れられぬ。
一度利得を收めし所を忘るゝ能はずとの義。

牙を嚙むで日を送る。
切齒扼腕の爲體にて月日を過すをいふ。

笈を負ふ。
遊學する事。笈は本箱なり。

黄表紙を嚙る。
少しく學問したるをいふ。

銀が飛ぶ。
精神疲勞したる時、眼前に銀色の光線輝く如きをいふ。

金魚に子子。
猫に松魚節(ネの部)に同じ。

金缺病にかゝる。
金錢の乏しきをいふ。

金科玉條とす。
金玉の科條といふ意、最も大切なる科條として之に則るとの義。

近所姑。
近所(家の附近)隣家の人は猶嫁の姑に置けるが如く非難小言が多く、何かにつけて氣兼をせざるべからず。

金時の棒振。
顔を赤くするをいふ。

金蘭の契。
親友の交をいふ。斷金の友ともいふ。堅き事金の如く芳しき事蘭の如しといふ意。

着物が五枚ある。
衣服の一枚より外に無きをいふ。一枚着れば、あとはしまい(四枚)なりとの謎。

錦花水月。
何程苦心すれども捕ふる能はざるをいふ。

京の從兄弟に隣かへず。
遠き親類より近隣(卜の部)といふ意なり。

京の妹に隣かへず。
京に在る妹よりは隣人の却つて便りとなるをいふ。

器用貧乏。
器用なる者多く貧なり故にいふ。

曲學阿世の徒。
邪曲の學を爲し世に阿る輩をいふ。

曲录娘。
僧侶を相手にする女のことをいふ。曲录とは椅子の圓く曲れる寄掛りあるもの、脚は多くは打遂に作りて牀机の如し、主に僧侶の腰をかくるものなり。僧侶をのするといふ卑猥の謎。

容貌より氣前。
容貌の美より性質の美をよしとする意。

切株にも着物。
風體の惡しきものも衣裝を飾れば美に見ゆとの義。

霧深ければ三日の内に必ず雨降る。
天時占候に出づ。

錐を以て地を指す。
量見の狹きをいふ。針の穴から天を窺ふに同じ。

桐生の着倒れ足利の食倒れ。
上州の桐生は衣服に奢り野州の足利は食物に奢るをいふ。

綺麗な錢儲けをして穢い生計をする。
其執る所の職業は上品なれども、收入乏しく從つて其の生計上の苦しきをいふ。

綺麗な花は山に咲く。
美花山中に開く如く、人も亦繁華の地より、田舍の地に却つて勝れたるものあるをいふ。

斬れぬ菜刀火の出ぬ燧。
下手な鍛冶を罵る語。

驥をして鼠を捕へしむ。
駿馬をして鼠を捕る猫の代理をなさしむる如く、偉才大手腕のある者をして凡人のなす事に當らしむるをいふ。

く

九月九日に雨降らざれば其の冬晴を主る。
天象に關する俗説。

九月九日に雨降れば禾收る。
天象に關する俗説。

串柿のぬき食。
少しづゝ漸次に費消しゆくをいふ。

腐れ目に爛れ目。
あしき事のある上にあしき事の重なるをいふ。

藥にしたくも無い。
少しもなき事。

くだまく。
酒に酔うてくだ〳〵しく繰り返しいふこと。「犬子集」
「花見にや酔ふてくだまく絲櫻」

口が逃げてゆくやう。
食急ぎすることをいふ。

嘴黄色い。
口猶乳臭いに同じ。鳥の雛は其嘴黄なり、故に若年未熟の者の喩とす。

口ばちをあてらる。
神佛に祟を受くる如き所爲なきも、世人より祟なりと言はるゝ事。

口に出でゝ耳に入る。
秘密のことをいふ。

口の虎身をはみ舌の劍命をたつ。
口舌の禍其身を害するに至るをいふ。

口を鼻の如くす。
無言にするをいふ。

屈原に屁をかがしたやう。
むづかしき容貌の人をいふ。

屈原の鼻汁垂れ。
鼻汁を垂るゝものをいふ。漁父の辭に屈原放たれて云々の文より出でたるなり。

宮内樣。
苦しき思の無くしていと呑氣なる人をいふ、苦無と宮内とかけたるなり。

國兄弟。
同國のものは互に兄弟の如く懐しきものなりとの義。

國を治むるは小鮮を煮る如し。
政治は小魚を煮る如く靜にすべしとの義。

苦は色變る松の風。
苦しき思あれば顔色を變ずるに至るをいふ。

食はうとて痩せる。
糊口の爲に心身を勞するをいふ。

食ひ物種盗めても人種盗めない。
子は能く父の形貌に肖似するを以て、人の妻を姦すれば其生兒に於てあらはるゝとなり。

首を切られた。
官吏などの休職或は免職せられたるをいふ。

食へないやつ。
制御し難き奸物なりとの義。

熊の手で胸を撫づれば癪が癒る。
爪を存したるまゝ熊の手を保存し置くは此の故なりとぞ。

ぐみたを引く。
酒に酔ひて繰言をいふ事。

群輕軸を折る。
輕きものと雖ども多く積めば車の軸を折るとのことにて多衆の力の偉大なるをいふ。

君子の申し子。
方正にして謙讓の德あるものをいふ。轉じてお人よしの事にいふ。

君子豹變す。
君子能く選善すとの義。豹の皮の毛色の變ずる如く全く變ずとの義。「易」「君子豹變、小人革面」轉じて君子とも稱せらるゝ位のよき人の變節するをいふ。

軍門に君命なく戰場に兄の禮なし。
戰場にては君命も兄弟の令も顧みる暇なしとの義。

久米仙。
女色に溺れ易き男をいふ。女の脛の白きを見て通力を失ひし久米の仙人の故事に出づ。

雲厚ければ雨多く薄ければ雨少し。

天象に關する俗說。

雲きれ〳〵になりて早き時は大風のきるしなり。

天象に關する俗說。

苦しい時は身一つ。

いない時は身一つに同じ。

車は三寸の楔にて千里を走る。

微少なるものが、偉大なる事を成す義なり。「世話藍」「車に三寸の楔なくば、車輪外れて、一里も往くべからず。千里を走る所以は、三寸の楔にて輪を保つに在り、人も亦胸三寸にて萬事成し得べきの譬あり。」

黑幕。

自分は世に知られぬ樣にして、他人を指圖し事を爲さしむるといふ。芝居の黑幕より出づ。

黑木と後家と觸つて見なければ分らぬ。

黑木とは樫、樫、樹の類を總稱していふ。其の木性の良否は接觸するに非ざれば知り難し。寡婦の貞操も亦此の如しとの義。

隗より始めよ。

人を得んと欲せば、先づ私より用ひ給へとの義。轉じて人に卒先して事を始むる慣辭となす。戰國策に曰く「燕の照王、賢者を招かんとして臣の郭隗に問ふ、郭隗曰く「今王誠に士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ、隗の事ふるを見ば、況んや隗より賢なるものをやと。」

刮目して見るべし。

以前爲すに足らざりしとて、之を侮らず、目を拭うて其將來を見よとの義。「吳志呂蒙傳」「士別而三日、當刮目相看」

棺を蓋うて事定まる。

事業の成敗は當事者の死後に至りて知らるゝとの意。

畫龍點睛法。

最も必要なる一部分を爲せば、全體の活動する事。文章を作るに、唯一字一句にて、全文を活かすといふ。恰も四壁に龍を畫きて、これに眼睛を點ぜざれば、何の勢もなけれども、これに點睛すれば天に沖せんとする勢なるが如し。

け

形影相同じ。

人は行と、心と相同じとの義。

荆公の字を解く如し。

勝手なる解釋をなして誤解多きといふ。宋の荆公字義を解くを好めり。或人覇字は何故西冠なるかと問ひしに、西方は陰なり、陰は物を殺す、春秋戰國の覇者は殺伐なりと。或人曰く覇字は雨かむりなりと、卽ち曰く時雨の如く人を化する意なり云々。東波或時荆公に波の字義を問ふ。波は水の皮なりと答へたり。東波笑うて然らば滑は水の骨かと曰へりとぞ。

傾城の誠と琴箱の反らぬは無い。

傾城は不信のもの、琴箱は反りたるもの故にかくいふ。

鷄鳴の助。

婦人の內助、能く夫を助くるといふ。詩經の鷄鳴篇に貞婦の事を書けるより出づ。

芥子粒の中に家を建つる。

最も小なる事業をなすといふ。「けしつぶの中くりぬきて家たて〳〵四室にしきりて寺子屋をする。」

假粧にて人を迷はす。

婦女子が衣裳を飾り、粉黛を施して人を迷はすといふ。「吾吟我集」「假粧にて、人を迷はすたはれめは、狐ならねど是も面白。」

下衆の逆怨。

下衆のものは、己れの惡しき事を棚に置きて、逆に人を怨むといふ。心無しの人怨み（コの部）參照。下戸の酒怨の轉か。

月前の星。

一方の光輝に銀壓されて、其の光輝を失ひたるといふ。卽ち一方の非常に劣れるといふ。

月蝕に月の色赤ければ旱のきるし。

俗說

喧嘩にかぶる笠はない。

喧嘩は避くること能はずとの義。

舷々相摩す。

物の摩れ合ふ事。日露戰爭の際海軍の公報中敵艦と舷々相摩したりとありしより言ひ始む。

けふになつて菊作らうと思ひけり。

事機既に後れたる喩。卽ち事の既に經過したる後にて始めて氣が付くとな。

現在の甘露未來の鐵丸。

今の快樂は後の苦痛となるとの義。「羅異記」「古人諺曰現在甘露。未來鐵丸。」

源助。

失敗したる時(源助だ)に云ふ。日清戰爭の頃關西にて言ひ始めたるなり。

煙にまかる。

人に氣焰を吐きかけられて、茫然なす處を知らざるをいふ。

煙にまく。

言論を以て、人を茫然たらしむること。

獻芹の誠。

物を獻ずるに謙遜なるをいふ。又た眞心こめたる獻上物にも言ふ。宋に弊衣を纉ひて冬日を過したる一農夫あり春暖に及び妻に言つて曰く、此の喧なる日を君に獻ぜばやと。里の富者これに語つて曰く、昔、莖芹の美味を富者に稱するものあり、富者これを信じて食ひしが口を螫し腹をいためたり。子の日を獻ぜんとするは恰も斯の如しと。

阮籍が青き眼。

喜んで友を迎ふるをいふ。阮籍は竹林の七賢人の一人なり。意に適する友來れば眼光青く、意に適せざる友來れば眼光白かりきと云ふ。

こ

濃茶目の毒氣の藥。

茶のあまりに濃きは氣を疲にする功あれども目を害すとの義。

口耳四寸の學。

耳に聞いて、直ぐそれを口に語る、其間僅に四寸を往來するのみ、之れを十分咀嚼し我有とする能はざるをいふ。

小馬肖に飼へ。

馬なして其の能を爲さしめんには、其前日に於て養を善くせざるべからず、人も亦然り、事あるに臨み俄に爲すは其の效なし宜しく豫て營養を施すべしとの義。

麹町の井戸へ鮑貝を投げたやう。

目の窪みたるをいふ。

鈎を盜む者は誅せられ國を盜む者は侯たり。

小盜は罪せられ、大盜は時を得顏なるをいふ。鈎とは腰帶の環。

五月五日雨降れば來年に至りて豐熟のきざし。

天象に關する俗說。

五月虹を見れば大麥小麥の價貴し。

天象に關する俗說。

後家と黑木とは觸つて見なければ分らぬ。

黑木と後家とは頻く見なければ分らぬ(補遺クの部)に出づ。

九室の坐敷。

山家の一室の家をいふ。表は一間、裏は八間(山)といふ洒落。

心の病は醫しがたし。

精神に發作したる疾病は治癒するに困難なりとの義。「傳燈錄」「心病最難醫。」

心は身の主。

精神は肉體の主たるべきものにて、能く肉體を左右するとなり。

心は外に現はるゝ。

中に誠あれば外に形はるゝといふ如く、精神作用が外部に表出するものなりとの義。

乞食嚇。

客貌陰惡の男をいふ。

乞食しても場でせい。

乞食も場所の條に出づ、

乞食袋と西の風は晩ほど大きくなる。

越後地方にて夕方に至り西風の強くなるをいふ。乞食は物を貰ひだめて、夕方に至れば益大きくなるなり。

腰きれ蜂。
西洋婦人をいふ。腰細き故なり。

こじり咎。
些細な事をやかましく咎むるものをいふ。刀のこじりの觸れたりとて咎め立するよりいふ。

腰抜けて手で柁を執る。
轉倒して起つ能はず、手足の必動かして漾搔くをいふ。

五指の更々彈くは一手の搏つに如かず。
個々分離して事を成すは一致團結して成すに若かずとの義。「淮南子」「五指更々彈、不レ若二拳手之一擊一。萬人更々進、不レ若二百人之俱至一。」

古人の糟粕を嘗む。
白家の發明卓見なく、古人の議論を講受するをいふ。

後生願の六性惡。
佛を信じて殊勝らしく後生を願へども其心ざまは惡しとなり。

五寸の鍵開闔を制す。
小なれども樞要の位置にあるをいふ。

姑息の手段。
當坐一時の間に合せにして、根本の策にあらずといふ意。姑は婦女子、息は小兒なり、女兒の智といふ事。

子寶。
子を多く持てるをいふ。子寶歴が細る、千の倉より子は寶の條參照。

事と品とに由る。
事と場合とに依りては強ち一定の主義方針に則ること能はずとの義。

事と品に依つたら。
事情に依つてはとの義。

言葉多きは品少し。
言葉多ければ品少しに出づ。

小供隱された鬼子母神。
大切なるものを失ひて狼狽することかいふ。鬼子母神本名訶利帝母神女體の佛にて其子多くして非常に鍾愛せり、始め他人の子の血肉を食ひしがある時、佛の其の子を隱したるを悲しみ遂に佛果を得るまでに懺悔得道したりとぞ、それより轉じて子を多く持ちたる女をいふ。

此世は堪忍の世界。
人世に在りては堪忍が最も大切なりとの義。

子は父の爲に隱す。
子たるものは我が親の非を隱すが道なりとの義。要するに父子相隱すは、天理人情の至りなり、故に直を爲すことを求めざれども、しかも直きこと其中に在りとなり。「論語」「父爲レ子隱。子爲レ父隱。直在二其中一。」

鯉の羹を食へば鬢そゝげず。
「徒然草」「鯉のあつもの食ひたる日は髮そゝげずとなん膠にも作るものなれば、ねばりたるものにこそ。」

鯉の水離れ。
思ひきりのよき事。又最後の決心を爲して既に其れを翻すに餘地なき場合をいふ。是が終局そとの意。

小鬢が兀ぐる。
非常に美味なるものを食ふことをいふ。

子煩惱に子無し。
子供を非常に可愛がるものは子煩惱といふ。子を愛すること深きものに子なしとの義。

根性の惡いものがするとおろし大根が辛い。
俗諺。

蒟蒻を積んで石垣に築くやう。
到底功を奏せざるをいふ。

米の飯。
いつまでも厭かずとの意。

五割の金借りても朝酒は飲め。
朝酒は門田を賣つても飲めといふに同じ。

聲金石より出づ。
美聲の事、「莊子」「曳縱歌商頌、聲滿二天地一若レ出二金石一。」

皷を鳴らして攻む。
他人の罪を堂堂と攻むる事。

さ

さあべる內閣。
海陸軍の將校を總理としたる內閣、若しくは軍人出身

の大臣多き内閣のことをいふ、要するに武斷派の勢力強き内閣のこと。

祭文下手でも貝吹は上手。

必要なる事の拙にして必要ならざる事の巧なるをいふ。祭文語りは下手なれども貝吹は上手なりとの意。されど貝は如何に巧に吹くも、肝腎の祭文下手なれば聞くに堪へざるなり。

草加越谷千住の前。

應答の盲輩に然うかといふより語呂拍子にいひかけてかくいふなり。

相馬流山女の夜這。

相馬流山は女の風俗淫靡にして、女の方より夜這をすとなり。

盃に推參なし。

盃を勸むるに高貴を憚らずとの義。

盃や疊の模樣ぢやない。

盃に酒をつぎしまゝ疊の上に置きて飲まざるを揶揄していふ盃の酒は潔く飲むべしとの勸告。

酒屋三代女郎屋一代。

酒屋は三代娼妓屋は一代にて其家業衰ふとなり。

盛り一時。

全盛の一時なるをいふ。

先の雁より手前の雀。

後の大利よりは眼前の小利を取るとの義、明日の百より今日五十といふに同じ。

先棒。

人の手先に使はるゝものをいふ。籠舁の先に立つ者を先棒といふより轉じてかくいふなり。

酒が盡くれば水を飲む。

藜酒家のことをいふ。

酒が言はする惡口雜言。

惡口雜言を吐くも皆酒に醉ひし故なりとの義。

酒は狂水。

酒は人を狂亂せしむる水なりとの義。

酒は天の美祿。

「漢書」「食貨志酒者天之美祿、帝王所以頤天享祀祈福。」

囁き千里。

私語することが遠く聞ゆるをいふ。

さすまいものは宮仕。

宮仕させなば徒に奢侈を覺ゆるのみにて世事經濟のことに暗く、後に一家を治むること甚だ拙きに至るべきを以て、宮仕は爲さしめざるがよしとの義。

誘ふ水あらばいなんとぞ思ふ。

女子が已に情を寄するものあらば直に應ぜんと欲すとの義。さそはれ易きは女の水性參照。

さつくばらん。

淡泊なること卽ちさつぱりといふほどの意にいふ。

佐藤齋藤犬の糞。

磐城相馬地方の諺。此地方にて多きものは佐藤齋藤姓及び犬の糞なりとの義。

五月雨は金も溶ける。

五月雨は長く降り續きて、道路泥濘となるが故に斯くいふ。「夫木集」「こがれだに溶くといふなる五月雨になにのいはは木のなれる君そも。」

三界に垣なし六道に邊なし。

三界とは佛說に欲界色界無色界の稱これを苦の本とし、これを超悟して後に道を得となり、六道とは、佛說に、冥土にありて六界へ行き別れる道、六界とは地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上なり。三界の苦に惱むもこれを超悟するも、六道の巷にさまよふも人間界天上界に達するもみな已が心一つに在りとの意。

三界無安。

此世は苦の世界にて安きこと無しとの義。「法華經」「三界無安、猶如二火宅一。」

三號雜誌。

發刊して三號ほどにて廢刊する雜誌をいふ。轉じて物の中途に廢絕して長く續かざるを云ふ。

三月虹を見れば米の價魚の價より貴し。

三月虹現るれば、其の年漁業に利ありて、米は不作なりとの義。

三月の月蝕は米の價貴し。

三月月蝕現はるゝ年は米作凶なり故に價貴きなり。

三月三日に風あれば梨に蟲を生ず。

解に及ばず。

三月三日の夜に蛙しきりに鳴けば旱。

解に及ばず。

三月四日に雷鳴れば其年大に豐熟。

解に及ばず。

三上吟。

馬上、厠上、枕上の三上は詩を考ふるによしとの義。

山上の城。

優れたるものは人に知らるゝ意。「新約全書」「山上の城は隱るゝを得ず。」

山上參りに跨がつて貰へば病氣起らず。

俗説。

產する時は額で小豆三粒煮える。

產の時の苦惱一方ならざるをいふ。小豆は煮え易き者に非ず、それが額で煮ゆるといふは蓋し婦人產する時は額に力が入りて熱すること甚しきをいふなり。

三人娘は一財產。

信濃の諺。信州は養蠶地なるを以て娘多ければ多く養蠶を爲して收獲を上ぐるなり故にいふ。

去後へ行くとも死後へ行くな。

いにいあとへ行くとも死後へいくな（イの部）に出づ。

猿が王になつたら猿の前で踊れ。

人格が卑しくとも權勢をだに有するものならば其人の前に屈從すべしとの義。

申時より後に日の兩方に雲あらば大風の玄るし。

解に及ばず。

猿に衣を被せる。

物を誤りたることをいふ。猿は申なり神といふ字の旁は申にして偏は示なり。それを誤りて衣偏にするをいふ。

申の日に炬燵を開くるな。

俗説。

し

舅の酒で友婿を饗應す。

己れの財を用ひず、他人の物に依りて事をなすをいふ。

四月虹を見れば五穀の價貴し。

四月に虹現るゝときは五穀不作なりとの義。

四月八日に雨降れば菓の實少し。

解に及ばず。

四十七の生み終ひ。

婦人は普通四十七歳まで子を產むといふ義。

四十七の放りわて兒。

年老いたる婦人の遲よく子を擧げたるをいふ。

時節到來。

運命の到れるをいふ。

市道の交。

利慾の爲に相集ること。

七月小に豆食はず。

陰曆七月小なれば豆不作なりとの義。

七里法華。

相州七里が濱附近は法華宗を信仰すとなり。

仕付を取らぬ衣服着て敗居を越ゆるな。

俗説。

室を異にし穴を同じくす。

夫婦の契をいふ、「階老同穴（カの部）に同じ。

濕を惡みて下に居る。

其惡を知りながら惡を爲しつゝあるをいふ。「孟子」「仁者榮、不仁者辱、今惡レ辱居二不仁一。是猶如二惡レ濕居レ下一。」

死急ぎと果物の取急ぎはせぬもの。

人は天壽を待つべし、妄に自ら死を急ぐべからず、果物も十分に熟するを待つて取るべしとなり。

死花を咲かす。

死して餘榮あることをいふ。

死人の所には必ず鬼あり。

人疾病に臥して死する前には精神力衰へて、自ら死の兆現るとなり。「恒言錄」「死人頭邊有二活鬼一、强將手下無二弱卒一。」

死にたいと麥飯食ひたいと程大きな虛言はなし。

死は人の願ふ所、麥飯亦人の好む所に非ず、然るに死にたいといひ、麥飯を食ひたいといふは、本心の誠よ

り出てしにはあらで全く偽りなりとの義。

死ぬ〳〵いふ者に死んだ例ない。

口に死ぬ〳〵言ふものは、眞實死する心にあらずして、たゞ人を嚇す爲にいふのみ、故にかくいふ。

死ぬるばかりは誠。

人生偽多けれども、死の一事のみは眞なりとの義。

死ねがな目くじろ。

死ねと呪ふこと、目くじろは目をくじらうといふ意。

士は己を知る者の爲に死す。

よく自分を知つて呉る〻人の爲には、命を捨てゝも辭すとの義。「史記」刺客傳「豫讓遁二逃山中一。曰嗟呼士爲二知レ己者一死。女爲二説レ己者一容。今智伯知レ我。我必爲報レ讎而死。以報二智伯一。則吾魂魄不レ愧矣。」

十一月に雷鳴ば來春に米の價貴し。

解に及ばず。

十一月虹を見れば大豆の價貴し。

解に及ばず。

澁柿。

書に拙きもの如何に骨折り修習しても、毫も上達の見込なきをいふ。

十月十五日に天晴るれば其冬は暖し。

解に及ばず。

十月十六日に天晴るれば薪炭の價賤し。

俗説。

十月朔日に天曇れば薪炭の價貴し。

俗説。

習慣は第二の天性。

習慣は全く人の性質を變ずといふ意。

十二重の窮屈よりも半纏羽織が氣が易い。

高貴の婦人より卑賤の婦人の氣樂なるをいふ。

持滿の戒。

盈つれば虧くる誡なり。「淮南子」「周公可謂能持レ滿」

進行博士。

議場にて議事の進行をのみ叫ぶ人をいふ。

死んだ馬に積めば動かぬ程。

少量のものを夥多のやうに故らに言ふこと。

死んだ龜さんあらしてのしよ。

紀州和歌山の方言に能くあらしてのしよを用ふ、例へば東京語のあなたねー、私やねー、といふを和歌山にては、あんた(おまはん)あらしてのしよ、あたいのしよといふが如し、卽ち何事を話すにもあらしてのしよを挿みていふ故にそを喇りてかくいふなり。

死んで骨は光るまい。

死してはつまらぬといふ義。

親は媒によらず。

夫婦親愛の情は媒介を要せずとの義。

節儉は臭い。

節儉は吝しき者との義。昔し僧あり沙彌を呼んで曰く、汝常に紙を儉約せず、以來は先づ紙にて鼻汁をかみ、後雪隱に行き尻を拭ふべし、これ卽ち儉約なりと。沙彌唯唯たり。數日を經て沙彌便を催して厠に行き紙もて尻を拭ひ、將に之を棄てんとする時和尚の前日の誡めを想起し、乃ち其紙にて鼻汁をかむ、臭堪ふべからず、出で來り嘆いて曰く「節儉は實に臭いものなり」。

上意風の如し。

上の意は下萬民に傳はる〻こと風の草を靡かす如しとの意。

正月に三ツ卯日あれば其年麥大豆熟る。

解に及ばず。

正月に三ツ午日あれば其年大に旱。

解に及ばず。

正月に三ツ巳日あれば其年大に旱。

解に及ばず。

正月に三ツ亥日あれば其年大水出る徵。

解に及ばず

上戸可愛や丸裸。

飲酒家を嘲りたる諺にして、常に酒の爲に財を費して遂には身に着くる衣まで賣り拂うて酒資となすに至るとなり。

上州盜賊。

古來上州には惡漢無賴の徒多くして、往々盜賊を働くものを出したり故に此の諺あり。

上州のべい〳〵言葉が止んだらば一貫三百積んだすべい。

上州の言葉の特徴ともいふべきは語尾にべいを添へていふことなり。例へば行くべい、遊ぶべい、寐るべい等の如しべいはべしの轉訛。

障子に目。

陰に爲すことも人の見るものありとの義。

鯱鉾立も藝の中。

らう仕換も職の中(ラの部)に同じ。

三味線張るのは猫の皮藝者の言ふことは嘘の皮。

藝妓の言に信なきをいふ。

雌雄を決す。

勝敗を決すること。

輸贏を爭ふ。

勝敗を爭ふこと。

主が主なら家來も家來。

主人がよければ家來もよく主人が惡しければ家來も惡しいとの義。

菽麥を辨ぜず。

至つて愚昧なるをいふ。菽は大豆なり大豆と麥とを識別する能はざる不懸の人をいふ。

守口瓶の如し。

沈默の人をいふ。「北夢鎖言」「朱文公曰守口如瓶、防意如城。」

出家侍犬畜生。

農工商等の相手に取りがたきものを列擧したるなり。

主の仰せには親の首打つ。

主の命令には如何なることにても從ふとの義。

酒甕飯袋。

徒に多く食する無能の人をいふ、腹が酒の甕、飯の袋と爲るのみの意。

春三夏六秋一無冬。

交接は四季其の度數を異にし、春は三回、夏は六回、秋は一回、冬は全く無さを佳とすとの義。

春秋に富む。

年齒若くして老境に至るまで尚幾多の春秋あるをいふ。

春情燃ゆ。

男女色情の盛なるをいふ。「詩經」「女懷春吉士誘之」。

蜀犬日に吠ゆ。

未開人が文明人の行爲を驚き怪む如きをいふ。蜀は山深くして、日み見る事少し、日出づれば群犬疑ひ吠ゆといふ。

食前方丈奇羅千箱。

榮燿榮華をつくす事。方一丈程食事を列ね、奇羅を千箱ほど有すとの義。

書生の羊羹。

薩摩藩の事。

書生の金米糖。

炒豆の事。

白川夜船の高鼾。

何にも知らぬ事。京の白川は川の名に非ず、されど京見物に行きたる田舍漢に白川の流は如何にと問へる時、知らずと答ふるも耻しとて、白川は夜船に乘りて通過したる故寐て川の樣を見ざりき抔答へたるより遂に諺となりたるなり。

知らぬ佛より馴染の鬼。

知り合はざる善人より能く知り合ひたる惡人を便とするをいふ。

虱に故郷なし。

虱は他人より移りたるなりとて、誰も我が身に發したることを語るものなし。故に虱の故郷は何れなるを知らずとの義。

虱の息も忉利天。

虱の息も忉利天に上るべしとの意にて、精神一到何事も成就せざるなしとの義。

尻切蜻蛉のやう。

短き羽織を着たる形容、

尻抜どんがめ。

物忘の早きものをいふ、物を聞いても尻から抜けて、毫も記憶に留まることなしとの義。俗にどんがめは尻を抜くといふより、詞の緣としたるなり。

しるくはつとに亞拉比亞馬春の永日に欠伸をさせて見たい。

大層長くなるべしといふ洒落。

白く塗りたる墓。
外面美にして、内部の醜陋なるをいふ。

す

鄒魯の學。
孔孟の學をいふ。孟子は鄒人孔子は魯人なればなり。

鋤を執るには力なく、食を乞ふには耻し。
進んで爲すの勇なく、さりとて零落もなす能はずとの意。

好の道に辛勞なし。
好む事の爲には辛苦を厭はずとの義。

すさまじきもの老女の化粧冬の月。
老いたる婦人の化粧は却つて物凄しとなり冬の月亦凄し故に并べいふ。枕草紙に出づ。

勸むる功德共に成佛。
人に善き事を勸むる功德によりて善を爲したるものと共に成佛すとなり。

雀に鞠。
猫に小判に同じ。

砂の上の家。
基礎の堅からざるをいふ。

墨を嘗めて酒を飲めば鬼となる。
俗說。

李にふたゝび花さけば秋に至りて大に霜降る。
解に及ばず。

摺木に注連。
物の不調和なる喩。

垂涎三尺。
長く涎を垂らすといふことにて、欲する情の切なるをいふ。美人を見て戀慕するなどにいふ。

粹が身を食ふ。
粹はいきとか通とかいふことなり、若き時に通人めかして無益な遊藝などを覺えて、有益の藝能を修めず後に活計に困り、路頭にさまよひ僅かの合力を得てあさ

水晶を灰汁でみがいたやうな人は少い。
純精潔白の形容。潔白の人は稀なりとの義。

水鋭の人。
人の模範となるべき人をいふ。

錐刀の末。
細微のこと。

せ

生あれば食あり。
生身に飼食ともいふ。天不レ生二無祿人一、地不レ生二無名草一の意なり。

誓言は神も受けず。
誓約の信じがたきをいふ。

青天の霹靂。
青天は晴天のこと霹靂は雷の急激をいふ。物事の不意ましき境遇になりはつるをいふ。

急激なるをいふ。

小便一町飯一里。
人の歩行する路程小便をする間に一丁ほど進み、一食事の間を以て一里位を歩行すとなり。

堰かれて募る戀の情。
戀情といふものは他より制止せらるれば猶募りゆくとなり。

赤繩足を繋ぐ。
男女婚姻の緣の定まること。支那の風俗に月下老あり赤繩を靴中に容れ、男女の足を繋いで夫婦となさば、離散も貧富も遂に違るべからずといふに出づ。

關の山。
それが終局なりとの意。

咳拂も男の法。
男は能く咳拂を爲す故にいふ。

世間知らずの高枕。
世上の風波の險を知らずして氣樂に居ることをいふ。高枕とは心に屈托のなき安心の體なるをいふ。

世上物騷我身息災。

世間の變災凶厄は可なり、願くは我身だけは無事安穩なれよとの義。同情に薄く利己に厚きをいふ。

脊中の蚤。

錢金は儲かり物。（お頼みといふ謎（貧ふた蚤））

金錢は働けば之れを得らるべし、今金錢なしとて、一生無錢に限らずといふほどの意を含む。

錢は阿彌陀ほど光る。

金錢は貴しといふ義。「通俗編」「錢可レ通レ神。」

錢儲けと死病はあだでない。

金錢を儲くるは容易の業にあらず、死病も亦なかなか苦しきものなり。

狹き門より入れ。

艱難を忍べば末は幸福ありりとの義。「新約全書」「天國に入る門は狹く亡びに行く道は廣し。」

善惡は地獄極樂。

善を爲せば極樂に到り、惡を爲せば地獄に陷る、善と惡とは地獄極樂の分岐點なりとの義。

善惡の報は影の形に隨ふ如し。

影の形に隨ふが如し（カの部）を見るべし。

線香の杖ついて底無袋をさげて行け。

到底吳るゝ見込なき所へ物を貰ひに行く者に向ひていふ。

先甲三日後甲三日。

甲は日の始（十二支を日に配當すれば）をいふ。物の始には三日ほど思案して爲すべしとの義。

仙氣筋。

物事其の筋を取り違へたるをいふ。

禪掃除、眞言料理、門徒花、盛物法華、淨土じだらく。

禪宗の能とする所は掃除に在り、眞言宗の能事は料理にあり、門徒宗は生花に凝り、法華宗は佛前に色々の物を盛りて供す、淨土はじだらくとて各宗を歷詆せるなり。

千手觀音。

風の異名。

千手觀音の誓には枯れたる木にも花咲く。

于手觀音の誓の堅きことをいふ。枯れ木に花咲く（カの部）參照。

先生と當字に書けば先青い。

先生と呼ばるゝものを嘲罵していふ。青いといふことは幼稚未熟の事にいふ、先青と先生と音相同じ。

前世の約束事。

現世の運命境遇はすべて過去の世に於て既に定まり居りしものなりとの義。佛教の因緣說より出づ。

禪僧招ぶなら馬ぢやと思へ。

禪僧は大食するもの故之を招待する時は其覺悟すべしとの義。馬は大食するものなればかくいふなり。

洗濯話。

同じ話を繰返すこと。

千疊萬疊只一疊千斛萬斛一杯の飯。

千疊に寢るも一疊。千石萬石も食一杯の條を見るべし。

雪隱と持佛なくてならぬもの。

人家には必ず雪隱と佛壇とを備へざるべからずとの義。

雪隱の火事。

自業自樂の事、やけくそ（燒糞）の意。

善に善報あり惡に惡報あり。

善惡共に其報あるをいふ。善には善の報惡には惡の報ともいふ。

善には善の報惡には惡の報。

善に善報あり、惡に惡報ありを見よ。

仙人の千年、蜉蝣の一時。

仙人の壽長くして蜉蝣の命短きをいふ。

仙松にせらる。

空腹になりて未だ食膳の供せられざるをいふ。千代萩の千松の故事。

前門虎を拒ぎ後門狼を進む。

一の災難を拒ぎ去りしも、また一の危害迫り至るに喩ふ。

そ

曾我の涙雨。

五月二十八日の雨をいふ。曾我の兄弟討入りの日大雨ありたる故事より出づ。

績飯殿原絲女郎。
そくひ男に絲女といふに同じ。

績飯男に絲女。
男は剛に女は柔なるべしとの義。

底澄んだり。（其所濟んだり）
其場限りにて後々の責任を負はぬことをいふ。

其處に底あり蓋もあり。
其れには事情の存するものありとの意。表面より觀れば其處にはさる理もあらんが、又裏面より見れば此處にも斯かる理ありとの義。

そしり〳〵媳使ふ。
姑が媳の惡口しながら媳に用事を賴むをいふ。

其手は桑名の四日市。
其手は食はぬ（其術には陷らずといふ意）といふを桑名の四日市といひかけたるなり、桑名も四日市も伊勢の國の名邑なり。

蕎麥種三角畫かきは五角。
豐後地方にて事の極めて分明なることにいふ。五岳は豐後の畫僧にて其名天下に高し、三角五岳對して押韻せる所妙味あり。

そろばんづくめ。
萬事勘定して爲す現金主義なるをいふ。

た

他愛なし。
他に愛すべきものなしとの意にて、專ら一事を思ひ込む事。單にそれのみといふ義。

大黑。
焚竈の異名。大黑は福を與ふるものなり。されば僧侶に福を與ふるものといふ義ならんか。

太皷のやうな判を押す。
事の確實なるを保證する義。

大根。
素人のことをいふ、大根は白きもの故素人のしろに通はせたるなり。

太皷をうてば鐘がはづれる。
一方に執着して他方を顧みる能はざるをいふ。

提婆が惡も觀音の慈悲、般特が愚痴も文殊の智慧。
佛徒は提婆を惡友と名づけ觀音勢至を勝友と名づく、又佛弟子に槃特といふ愚なる者ありて常に愚痴をこぼし、文殊といふは非常の智者なり。諺の意は佛徒を害すること甚しき提婆の惡も觀音の慈悲心に克つこと能はず槃特が愚も文殊の智に依つて次第に感化せらるといふならむ。

大名の懷子。
至極無能なるものをいふ。

唐紙唐紙假名で書け。
紛れ易きものはよく注意すべしとの教訓。たうしとは支那制の一種の紙をいひ、からかみとは五彩種々の模樣ある紙をいふ。何れも漢字にては唐紙と書けども、斯くてはたうしなるかからかみなるか判別しがたきを以て假名で書けと注意したるなり。

陶朱猗頓の富。
巨萬の財を蓄へたるものをいふ。陶朱は越の忠臣范蠡が越を去つて後に陶に至りて非常の金滿家となりし時の稱。猗頓は漢の金滿家なり。

中聖人。
酒に醉ひたる人。昔支那にて清酒を聖人といひ、濁酒を賢人といひたることあり。聖人に中てられたりとの意なり。

刀筆の吏。
官吏の事。昔支那にては簡に刀を以て字を刻したるよりいふ。

鷹が雀を捕るやう。
猫が鼠を捕るやうといふと同じく、手を下すことの容易なるをいふ。「左傳」文公十八「見ㇾ無ㇾ禮ニ於其君一者ト誅之。如ニ鷹鸇之逐ニ鳥雀一。」

擇木の暇なし。
窮境に陷りたる時は、職業の良否を顧みる能はずとの義。

巧なる僞は拙き誠に若かず。
實意なき深切の巧なるよりは、拙くとも實意の在るがよしとの義。

多藝は無藝。
多藝の者は、一藝も秀でたるもいなしとの意。

竹を植うる時は五月九日と書して植うべし。
解するに及ばず。

たゝさやめば食ひやむ。
職業を休めば糊口に差支ふるをいふ。

太刀魚連。
巡査抔のサアベルをつりたる連中をいふ。其洋刀の太刀魚に似たればなり。

橘淮北に移せば枳となる。
江南の橘江北に移せば枳となる（カの部）に出づ。

健康萬貫目。
身體の壯健なるを貴しとする義。

龍野訛は猫でも訛る。
播州龍野邊の方言能く訛る故にいふ。

棚卸をする。
他人の非を並べ立て、惡口雜言すること。

掌を指す如し。
容易なること。掌を反すが如しともいふ。

他人の虱は白い。
他人のものはよく見ゆるものといふ意。

貍。
狡猾にして能く人を騙すものをいふ。

塔は下から組め。
凡そ物事順序を追ひ、卑き所より始めて漸次に高きに進め行くべしとの義。「井蛙抄」「民部卿入道中されしは歌をば塔をくむやうに、塔は上よりくむことなし。地盤よりくみあぐるやうに下句よりよむなり。」

卵を見て時を求む。
早計の事。

騙す前には先欺さるゝ。
人を欺く者は、其前に欺かれ先方に利を喰はして油斷せしむること。

溜り小法師がない。
堪へられぬといふ義。

太郎坊も爲となりては爲だけの智恵。
後傑の者にても卑き地位に居れば、其地位だけの伎倆を見はすに過ぎずとの義。太郎坊とは天狗のことをいふ。天狗（補遺テの部）參照。

椋の木にもかゝるが好い。
如何なることなりとも關係して置けば多少の利あるべしとの義。椋の木は幹に刺多さものなり。

盥半切を哂ふ。
自分と殆ど同樣にして格別に差異の無きものを笑ふといふことにて、自己を顧みずして他人を譏るをいふ。半切は盥の深さを半にしたる器にして、餅を盛るに用ふるもの盥と形を同じうす。

盥廻し。
數人相談して詐僞を爲すこと。

ち

近い火で手を煖る。
先當坐の利を收むるをいふ。近火で手を煖れ參照すべし。

雉膏食はれず。
智能ありといへども用ふる能はざるをいふ。雉膏は甘味なるもの。

近づく神に罰あたる。
神を信ずれば、却つて神罰を受くる樣のことありとの意にて、寧ろ神を信ぜざるに如かずとの義を含むさわらぬ神に祟なしといふと相表裏して宗教を否定したる諺なるが、孰れも輕じて事に關係するを避けよといふ消極的の諷示なり。

近火で手を煖れ。
徒に遠大の計を考へんよりは、先手近く眼前の利得を計れとの義。

近惚の早脈。
物事に惚るゝこと早く脈くことも亦早きをいふ。

力瘤を入れる。
熱心に力を盡すことをいふ。

筑前女に筑後男。
筑前は女筑後は男よしとなり。

地獄極樂は心に在り。

地獄といひ、極樂といふも、皆我心次第にて、惡心煩惱の苦痛は是地獄、善心平和何等の苦惱なきは是極樂なりとの意。

地獄の一丁目。

金錢を費消せしむることに巧なる者の多き旅店又は驛などをいふ。

地獄腹。

女子ばかり生む女のことをいふ。

地獄耳。

聞けば直ぐ耳に挾みて決して聞き棄てにせざるものをいふ。

ちつこ兵衛。

矮少なる身軀の人をいふ。

持拂堂と年寄親は置所なし。

佛壇と老親とは厄介なものなりといふ事。

狆が嚏をしたやう。

狆の貌へ揚をしたやう。

前に同じ。

壁が道に後れたやう。

成效の見込なきをいふ。跛者道に後れたれば遂に追ひ付くこと能はず故に喩とす。

壁も旅心。

人の心の浮き立つをいふ。春の陽氣には壁者と雖ども自ら旅行を思ひ立つとの意。

提燈と睾丸は皺がある程よい。

孰れも皺がある程大なり。大なるをよしとする意。

頂禮高じて尼と爲る。

假初の信心より佛道に入るをいふ。寵愛高じて尼になすより轉訛せしものならむ。

ちやつちやの曾孫。

最も短身の人をいふ。ちやつちやは鷸鴕といふ小鳥の稱。

矮鷄。

身短小の人をいふ。ちやぼは雞類中の極めて小さきもの。

ちやほや言はるゝ中が花。

年猶壯にして容貌の美とか醜とかいはるゝ中が最も生

榮のある面白き時代なりとの義。三十四十になれば容貌の美醜は人の評判にならざればなり。

寵愛高じて尼になす。

娘を寵愛するの極遂に尼となすといふ意にて子を溺愛して養育を誤まることをいふ。「誰が身の上」「寵愛高じて尼になるとの諺昔の佛御前に限らず。」

痔を詆りて車を得。

畏しき事を爲して利益を得る者をいふ。昔支那の桀王病あり醫を召す「癰を破りたるものは車一乘、痔を舐りたるものは車五乘を與へん」と言ひたるに出づ。

つ

朔日降は其月の旱魃。

朔日に雨降るときは其月は晴天多しとなり。

月が取持つ縁。

月見などが縁となりて交を結ぶをいふ。

月の暈の内に星あれば雨降らず。

「天時占候」「月の暈の内に星あれば雨降らず星なければ雨降る。」

月夜に兎を盥にふせ置くも必ず逃げ去る。

俗說。

机の上の議論。

空論をいふ。如何に巧に論じても實際に問に合はざることをいふ。

つち子を產む。

私生兒を生むこと、蛾などの交尾せずして、產める卵をつちごといふ。

筒井流。

二心あるものをいふ。筒井順慶が山崎合戰の勝敗を見て去就を決せるよりいふ。

筒持たせ。

なれあひ姦通をして金錢を奪ふこと。

十九や廿は色盛り。

十九、二十頃は體力旺盛にして容色潤はしく色情の最も盛なる時代なりとの義。

角を折る。

我慢の心を除き去ることをいふ。以前よりは遙に溫順になりしことをいふ。

燕の口に鳴子を付けたやう。
よく饒舌するをいふ。燕はよく囀る鳥、鳴子は音の騒々しきものなればかくいふなり。

燕の幕に巣ふ如し。
危き事をいふ。

燕の百囀り。
饒舌を弄するものをいふ。

つぼかん。(坪瓮)
考へ違ひしたることをいふ。大工が家の建坪數を勘定する時、屋根下の計算を誤り易きよりいふ。

つぼを押ふる。
他人の思慮せる急所を押へいふ事。灸する局所をつぼといふ。

妻の言ふに向山も動く。
妻の言に非常の勢力あるをいふ。

摑み食。
男女雖彼の差別なく多くに關係するをいふ。

旋毛の片寄つた人は根性が悪い。
解するに及ばず。

旋毛の眞直ぐな者は氣むづかし。
解するに及ばず。

罪なくして配所の月を見たし。
罪の爲めに謫流せられて見るといふに非ずして閑靜なる地の月を賞したしとの義。「徒然草」「顯基の中納言のいひけむ配所の月罪なくて見ん事さも覺えぬべし。」配所とは配流の地即ち謫地にして京を離れたる地をいふ。

罪なくして配所の月を見る。
冤罪に擬りて謫流せらるゝをいふ。前の諺參照。

積讀法。
積んで置く法のつゞまりにて書籍を購ひて讀まず徒に積み置くをいふ。

積る病が癪の種。
癪といふ字を疝と積とに分解していふなり。

強いばかりが武士ならず。
勇武強きのみが武士の本領に非ず宜しく同情に厚かるべきが武士の道なりといふ意。

鶴仰き鳴くは空晴るゝ兆るし、俯き鳴くは雨の降る兆るし。
解に及ばず。

て

亭主の好な赤鰯。
亭主のすきな赤烏帽子より轉じたるならむ。

手が空いたら口が開く。
働くことが休めば直に食を欲するをいふ。

出來易いものは米の飯に禍。
米飯を炊ぐには容易く出來、禍も亦生じ易しとの義。

手切りまら出し道具探し。
大工の弟子のことをいふ。よく手を切り陰莖を出し、道具を探すが能にて、其技の未熟なるをいふ。

挺でも棒でもゆかぬ人。
頑固な人をいふ。挺にて撞れても、棒にて押しても動かぬといふ意。

出鱈メーション。
出鱈目といふことを英語の語形に擬していふなり。

手附損。
物品賣買の約束を爲すとき、買人より賣人に其價の幾部分を先づ渡し置くを手附を打つといふ。かくて後に買人の方違約したるときは渡したる手附金は賣りたる人の有に歸し買人は手附を損することなり。

手附損倍戻し。
手附損と手附倍戻しとを併せていふなり。民法第五百五十七條第一項に曰く買主が賣主に手附を交付したるときは、當事者の一方が契約の履行に着手するまでは買主は其手附を拋棄し賣主は其倍額を償還して契約の解除を爲すことを得と。

手附倍戻し。
手附損と反對の場合にして、賣りたる人が違約したる際には、前に受取り置きし手附金を倍にして、之を買人に支拂ふをいふ。

鐵に磁石。
猫に鰹節といふに同じ。

手味噌をする。

他人を欺罔する事。自分勝手にして人を欺くないふ。

天狗。

自慢するもの、異名。鼻を高くすといふ意。天狗とは想像上の怪物の名にして、深山に棲み形は人の如く面の如く鼻高く翼ありて空中を飛行するものなりといふ。

天狗樣の申し子

天狗といふに同じ。

天狗沙汰。

自慢することないふ。天狗を見るべし。

天狗の鼻比べ。

互に競うて自慢い仕合すること。天狗を見るべし。

天神と金比羅は神無月のお留守番。

神無月(十月)には八百萬の神が出雲に集會して留守なれども天神と金比羅とは其集會に出でずといふ俗説。

天上入る日の如し。

天上とは天一天上のことにて天一神が天に上り居る十六日間の稱。癸巳の日天上に入るなり、其日晴天なれば十六日間多く晴れ續き雨天なれば雨續くといふなり。

天上照る日なし十方雨降らず男嘘言はず。

天上十六日間は多く雨降り十方くれ(天上に入るより前十日間をいふ)は多く晴れ、男子虚言せざるが常例なりとの義。

天保錢。

智慧の足らざるもの即ち愚なるものないふ。天保錢は天保六年に始めて鑄造したるもの始めは四十枚にて壹兩、安政年中六十枚にて壹兩、萬延以後は百枚にて壹兩に當り、惡貨幣法にては百二十五枚を以て壹圓に換へたり、當百といへども其實八厘にしか通用せず即ち一錢に二厘足らず、故に喩とす。

と

戸板流しの水の面。

以前の感情の衝突など洗ひ流したる如く、奇麗サッパリと忘れ去ることないふ。

東海の墓普請。

長崎の諺。手間入りて埒の明からざることないふ。「西肥」「長崎春徳寺の山上に、東海氏の墓あり、其廣大美麗なること日本第一といふべし。(中略)初めて造り立てたる時の費、銀五十貫目いりしといふ。其後猶心に飽きたらず二三十年が程は常に石工を雇ひ、墓普請せしとぞ。それよりして、長崎の諺に手間いりて埒の明かざる事を東海の墓普請といふ。」

冬瓜が粉を吹いたやう。

顏色の青き女が、白粉をへたに塗りたる形容。

冬至から蘭の節だけ伸びる。

冬至後は、日が毎日蘭の一節づゝほど長くなるといふこと。

豆腐屋の朝起。

豆腐屋は朝起くること頗る早し。

時の將軍に從へ。

其の時、其時の權勢を有する者に從ふべしとの義。

時を知らぬ山伏。

時勢を知らぬことないふ。「隣の疝氣」「時代遊の心ゆゑ、當世に合はぬ筈、時を知らぬ山伏なりと我身ながら腹かゝへ」

ドクトル膏藥先生。

洋行歸りの醫師を罵りて言ふ。毒取る膏藥の意。

毒藥變じて甘露と爲る。

毒藥變じて藥となるといふを、甘露と爲るといひかへたるならん。「平家物語」「毒藥變じて甘露と爲るといふことあれば云々。」

毒藥變じて藥と爲る。

己れの不利にして害毒と爲る如き惡しきものにても時に臨んでは却つて己れの利となりて其用を爲すとの義なり。和蓮と稱する野葛は毒藥なれども、蝮蛇人を刺せる時に用ふれば癒ゆといふ事淮南子に見ゆ。

年寄の子は寒がる。

老人の子は寒がる(ヲの部)に出づ。

閉ぢ目を合す。

行爲の折目正しきこと即ち几帳面なるないふ。例せば約束を逆へずして能く守る如し。

鮨鬚。

鬚の少くして恰も鯔の鬚の如きをいふ。

鯔を椽の下へ入れると火に祟る。

俗説。

取つたか見たか。

成るか成らざるか一番試みに行つて見んと決心する場合にいふ。（取るか見れるかの意）。取つたか見たか江戸見たかとつゝけていふこともあり。

隣の貧乏雁の味。

隣家の貧窮を喜ぶ義。

鳶が孔雀を生む。

鳶が鳶を生むといふに同じ。

鳶の子鳶にならず。

鳶の子は矢張り鳶になりて鳶とはならずとの意、凡庸なる者の子に俊傑のなきをいふ。

遠くなりや薄くなる。

遠く相離るれば自ら情誼の薄くなるをいふ。

とぼけとぞまかしは魚屋の儲け。

魚を鬻ぐもの新鮮ならざるものを鮮魚らしく。。。。ごまかし。後に其れを咎めらるゝ時はとぼけて平氣に濟ましゝ斯くて利益を收むるものなればかくいふ。

鈍な鴉が盆に腹病む。

經濟に拙なるものが盆の支拂時に至りて困窮すとの喩。

鈍な子は可愛。

親は愚鈍なる子ほど猶可愛いとの義。

富山淨瑠璃加賀謠。

富山の人は淨瑠璃に凝り加賀の人は謠に凝るをいふ。

土用菓子。

なつかしといふ謎。夏菓子を懐かしとを通はせたるなり。

取らずの大關。

未だ力量を人に見せずして最も力あるものゝとせらるるをいふ。

虎の子渡しするやう。

生活の遣り繰りをする喩。虎が橋上に子を渡す童話より出づ。

虎の卷。

最も恃みとする所のものをいふ。

屠龍の技。

用を爲さゝる藝術のこと。

盗賊の選殘し。

粹を抜き取られて後に殘りし者の碌なものなきをいふ。

盗賊も十年。

何事を爲すにも永き年月を要するものにて一朝一夕には成りがたしとの義。人間の最も馴れ易き惡事にても、人に十分知られる迄やるには十年以上も要さればならぬとの意。

盗賊せぬは氏神ばかり。

人にして殆ど盗を働かざるものなしとの義。唯氏神のみは盗せずとの意。

とろめんのやう。

よくすべるといふこと。薯蕷汁に素麺をつけて食へばよくすべるものなればかくいふ。

な

無い子では泣かれぬ。

子の無き者は子の爲に泣くといふやうのことなし。

ナイフ。

錢の入らざる財布。錢は無い布との洒落。ナイとサイと語呂相同じ

仲人の嘘七駄片荷。

雙方の間に立ちて賣買とか結婚とかの周旋をするものを仲人といふ仲人の言は詐り多きものといふ義。七駄片荷とは嘘の多き形容。

媒は宵の口。

媒口とて媒は男家に行きては女の方のよいといふことをいひ、女家に行きては男の方のよいことをいふといふより、。。よいと、よひの口のよひとを通はせたるなり。宵の口とは宵の間をいふ男女結婚は多く夜に於て式を擧ぐ、媒は唯宵の口の式に列するまでのものとの意あり。

長脇差。

賭博するもの、異名。

流るゝ。
集會の來會者少く、遂に議事出來ずして散會するをいふ。又貸屋に債務の償却を爲さゝるより典物の權利を失ふをいふ。

泣く子の口にも物食ふ。
愛憐悲歎の中にも利慾の念離るゝ能はざるをいふ。

名古屋女に宮男。
女は名古屋がよく男は宮がよしとの義。

名古屋男に岐阜女郎。
男は名古屋がよく、女は岐阜がよしとなり

長崎バッテン江戸ベラボウ。
長崎の方言バッテンを多く用ひ、江戸にてはベラボウを多く用ふ。

爲すやうにならいで、なるやうになる。
事の已れの爲さんと欲するやうにならざるをいふ。

情を知るは誠の武士。
同情心に富むは眞の武士なりとの義。

鉈豆を食へば狐に化されぬ。
俗說。

鉈を貸して山を伐られる。
恩を施して却つて其の害を受くるをいふ。

鉈を放る。
見え透いたる僞をいふ事。樵夫の語。

七上り七下り。
七轉八起(しの部)の條に出づ。

七轉八起。
七轉八起。(ゝの部)に出づ。

七日の旅路。
月曜より日曜迄の事。クリスチヤンの語。

生木若味噌若世帶。
何れも損失多きものなり。

鰌は酢で食へ男は氣で食へ。
男子は氣肌のよきを貴ぶとの義。

鰌髭。
髭の少きをいふ。

並や大抵でない。

容易ならざること。

難癖つける。
諸種の惡名を頂はしむるをいふ。

難產。
事業の折角企畫せられながら容易に成功せざるをいふ

奈良男に京女。
奈良は男よく京は女よしとの義。

成ると成らぬは目元で知れる。
人に依賴する事の成否は其眼色によつて知ることを得との義。

成程落つる柿熟柿。
成程といふ事の洒落。

に

煮えきらぬ。
果斷なき人をいふ。

にが手の人蟹に觸れば蟹の爪が落つる。
俗說、にが手とは、人の氣性の忌み嫌ふべきものをいふ。

憎い〳〵は可愛のうらよ。
にくいは可愛のうらに同じ。

西風と夫婦喧嘩は夕限り。
西風は夕限りに吹きて夜に入つては吹かず夫婦喧嘩も亦夜に入つて直るとの義。

錦着る山は裸になる下地。
奢侈は零落の基なりとの義。山林の美なるものはやがて伐採せられて裸山となるなり。

西の海へさらり。
萬事心に止めぬやうに忘れてしまふこと。

西の久保で百萬石も取つて居るやうにいふ。
西の久保は昔邊地にしてよき大名屋敷などなかりきとなり。

煮しめ牛蒡のやう。

にし――にほ――にの――には――にん――にょ――ぬ――ぬひ――
ぬか――ぬき――ぬく――ぬけ

白木綿のいたく垢づけるをいふ。

二竪に犯さる。

病氣にかゝる事、病膏肓に入る（補遺十の部）の條參照

日本晴。

氣の冴えゝしたるをいふ。眼病者の久しく視力劣へたるが俄に癒えて萬物を見得たる時の如き心地をいふ。誰に憚る所なく、毫も疚しき所なきをいふ。

二の町。

物の第二番目なるをいふ。

二八月に思ふ子船に乘すな。

二月八月共に海上風波險惡なり故にいふ。

人形書く子は頭かく。

物を眞面目に學ばざる者は後に至りて恥をかくといふ義。

人參の白あへ。

色の黑い女の甚だ拙き粉粧したる體をいふ。

女房のやく程亭主もてもせず。

妻の嫉妬する程の亭主に價値なしとの義。

女房は床の間の置物。

妻を重要視せざること床の間の置物は一の裝飾に過ぎず。

ぬ

鵺文章。

文體の種々混淆して、首尾一貫せざるをいふ。鵺は源三位頼政が射て獲たりといふ怪獸の名、猴首、虎身、蛇尾にて聲は鵺の如しといへるより、誤て其名とせるなり。

糠袋も縫へぬ。

技藝なき女子をいふ。

拔身男。

禪せざる男をいふ。拔身とは鞘を脫したる刀なり。

ぬく〳〵。

一事ありて間もなくといふ意。席の猶溫なる事より出づ。

拔作。

馬鹿のこと。

ぬらくらもの。

怠惰なるものをいふ。

溜井の道と女の道に迷はぬものはない。

土佐の諺、女色に迷ひ易きをいふ。土佐郡溜井の里道岐路多くして迷ひ易し故に並べていへるなり。

ね

ねき物。

寢置物の意か。久しく店頭に置きて賣れざる品物。

猫の子青草をかめば雨降る。

解に及ばず。

猫に石佛。

相關せざる意。

鼠だに皮あり。

鼠でも皮あり況んや人にして義なくんば死するに若かずとの意詩經に出づ。

根つけを離さぬ。

小兒が愛して到る所に連れ行く事。

念佛申せば鉦がはづれる、

一方に偏する喩。此事に注意すれば彼事に疎なるをいふ。

念佛者と椿の木に直なるものなし。

念佛者とは口に念佛を唱ふるもの卽ち佛法を信ずるものをいふ。殊勝らしく信心するもの、心は直ならずとの義。椿の木は幹の直なるものなし。

の

殘る煙が癪の種。

遠く航海する人を繫ふる意。俚謠に「蒸汽や出て行く煙は殘る殘る煙が癪の種。」

野槌のやう。

身長短くして、肥太りたる人をいふ。野槌は太くして短き蛇の一種なり。

ぬら――ぬる――ね――ねき――ねこ――ねつ――ねん――の――の――
の――のつ

咽を扼して脅を打つ。
急所を押へて人を苦しむる事。

のゝ字書く。
女子の耻ぢらひて俯向き、指もて盤などをいぢる有様をいふ。

野邊の陽炎か春の雪。
果敢なきことの喩。

糊かつた天神様。
すました人の形容。

は

齒ありて身を焚く。
財寶ある爲に禍を受くるをいふ。左傳に象は齒有る爲に其身を焚くとあり。

俳諧に古人なし。
和歌に師匠なしといふに倣うて、芭蕉が唱へ出したるが、遂に諺となりしなり。

ハイカラー。
高きカラーのことにて西洋風の人をいふ。轉じて服裝を飾り、文明流を氣取る人の稱となす。

灰吹から龍が出る。
有り得べからざることの喩。

背水の陣。
身を死地に置くこと。必死の覺悟を以て事に當らしむる爲に進むことを得て退くこと能はざる地に居るをいふ。韓信が背水の陣をはりしより出づ。

飽食暖衣は却つて命短し。
大食短命いふ諺もある如く食飽くほど食するは衛生上害あり、またあまり衣を暖く着るは皮膚を弱くするものなれば是亦衛生に不利なり故にかくいふ。

坊主ぼつかい 法螺の貝中を割つたら鳥の糞。
僧侶の沒戒を嘲る洒落。僧侶は肉食を禁ぜられたる者なれど、人知れず鳥などを食するとある故に、坊主ぼつかい法螺の貝といふ貝の中に鳥の糞がありと言なり。

亡羊の嘆。
事業を爲さんとする時方針に迷ふこと。列子に楊子の隣人羊を亡ひ黨人を率ゐてこれを追ひしが岐路多くして得ざりしといふ故事より出づ。

馬鹿士。
博士を罵りていふ。

墓場の犬。
人を喰ふといふ喩。

伯牙の絃。
友情の深きをいふ。伯牙琴を愛せしが友人鍾子期死して其の絃を絶ちたり。

賭博は色より三分濃し。
賭博は女色より猶抑制しがたきものなりとの義。

化物と食物に油斷すな。
食物に注意すべしとの意。

化物と安物はない。
妖怪は實際有るべきものならず、物品も亦安價のもの實際なし、安しと思へば品質惡しく、却つて高價に當るものなり、故にかくいふ。

箱根の馬は目から弱る。
氣を遣ふこと甚しければ、心を疲らせ、心疲れて遂に眼を病むに至るをいふ。箱根の險阪を越ゆる馬は疲憊すること甚し故にいふ。

箸と鼻とは太いのへかゝれ。
箸は太きがよく、鼻も太きに事ふるがよしとなり。

橋の下に坊主千人。
粥をたくこと、鍋の鈎を橋に見立て湯の沸騰するさまを坊主と見立てたるなり。

初きらめき神烏帽子。
最初には其の靈顯著しとの義。

箸折るれば親に離れ櫛の齒缺くれば子に別る。
俗諺。

蜂に螫されたやう。
酒に醉ひて顏の赤くなりたるをいふ。

鉢坊主の手の内程。

物い少量なる形容。

鉢巻連。

勢働者等頭に鉢巻せるものをいふ。

八分。

十分に二分足らずといふ意。馬鹿の事をいふ。

バチルス。

世を害する分子といふ意。

八角の水。

澄みきつた水。（角きつた）四角の角をさればいふ八角となる故にいふ。

伐性の斧。

美人の男子を墮落せしむるをいふ。

破天荒。

從前例なきことをなすをいふ。「唐摭言」「荊南之學人多不レ舉レ名。號二之天荒一。大中四年劉蛻及第試驗。崔魏公賞レ破二天荒一。資蛻錢七十萬。」

花の下より鼻の下。

虛榮よりは實利を貴しとする喩。鼻の下は口のことなり。風流を解せざる俗物の花よりは口を愛すといふ意。

花のものいふためし。

「古今著聞集」「菅丞相筑紫にうつりたまひてふるさとの花のものいふ世なりせばいかにむかしのことを問はまじとながめければかの木先久於故宅。離廢於久年。鹿於作所。無主又有レ花。」

鼻藥をかます。

金錢を窃に人に贈りて自己の利を謀る事。

鼻々する。

人と人と顏相接近して行き合へるをいふ。

花は折りたし梢は高し。

求むること切なれども得ること能はざる喩。俗歌に「花に折りたし梢に高し離れがたなの木の下や」

鼻を以て口とせよ。

口を鼻の如くせよといふ意にて沈默を守れとの戒。「法句譬喩經」「佛、羅雲に告げたまはく、我又喩を說かむ。

昔國王ありき、一の大象ありて猛惡にして能く戰ふ、其力勢を計るに五百の小象に勝れり。其王軍を興し逆國を伐たんと欲す、象に鐵鎧を被らしめ象士之を御す。雙矛戟を以て、象の兩牙に繫ぎ、また二劍を以て、兩耳に繫ぎ、曲刄刀を以て象の四脚に繫ぎ、また鐵槌を以て象の尾に著く、象に九兵を被らしむ。唯象鼻を藏して護りて鬪に用ひず。象士象の身命を護ることを知るを喜ぶ。所以は何ぞ、象の鼻は軟かにして箭に中れば卽ち死す、是を以て鼻を出して、鬪はざるのみ。象鬪殊に久しうして、鼻を出して劍を求む。象士與へず。此猛象身命を惜まず、鼻を出して劍を求め、鼻頭に著けむと欲すといへども、王及び群臣、此大象を惜み、鬪ひ得しめず。佛羅雲に告げたまはく、人九惡を犯すも惟當に口を護ること此大象の鼻を護りて、鬪はざるが如くすべし。然る所以は、箭に中りて死せむことを畏るればなり、人も亦是の如し、所以に口を護りて當に三塗地獄の苦痛を畏るべし十惡盡く犯して口を護らざる者は此大象の身命を裹ふことを計らず、鼻を出して鬪ふが如きのみ。」

蛤。

物品を見て買はざる事。見くさつて（肉腐さつて）買ひ（貝）くさらぬといふ意。

はてつた後て井戸の蓋をする。

事既に過ぎし後にて用心する喩。

播州へ行て淨瑠璃詣るな。

播州の人は淨瑠璃に巧なるが多し故にいふ。

半鐘盜賊。

身長高きものをいふ。

伴食大臣。

無能なる大臣の事、經綸の才なくして徒に大臣の位をお相伴せりとの意。これより轉じて官吏等の無能なるを伴食といふなり。

半風子。

虱の事。

バンカラー。

ハイカラーの反對、蠻からの意にして文明を氣取らざるもの。

流行稻荷は鳥居でも知れる。

參詣者の多き稻荷は鳥居が多くして立派なり。外觀の

美を見て、其内容の美を推知せらるゝをいふ。

腹の雷雪隱で夕立。

腹が鳴り滋く下痢するをいふ。

胎がつく。

妻の胎める時、其の夫獵に行く時、最初一度獲物あれば其後行く度に獲物あり、最初一度打ち損ずれば其後は一も得る所なきをいふ。

腹を割りて珠を藏す。

身を惜まず財を愛するをいふ。

パリサイ宗。

儀式のみ喧しき人をいふ。猶太のパリサイ宗は形式に拘泥し儀式を重んじたるをいふ。

針の穴の駝駱。

到底出來得べからざるをいふ「新約全書」「富める者の天國に入るは駱駝の針の穴を潛るより難し。」

春日に燒けたのは穢多も惚れぬ。

春日には顏色黑く黑くなり易し故にいふ。

羽織の紐で胸に在る。

方寸の中胸中に在りとの義。

ひ

日蔭の花。

自然の美質を具へ居れども人に知られざるをいふ。

東雷雨降らず。

越後地方にていふ諺東の方に雷鳴する時雨降らずとの義。

比企尼根性。

尼僧は大抵吝嗇なり故に吝嗇の念強きをいふ。といふ意。

獼猴が帝釋を笑ふ。

愚者が賢者を哂ふ喩。

備前の着倒れ因幡の食倒れ作州の家倒れ。

備前の人は衣服に奢るとなり。因幡の人は食物に奢り、美作の人は家屋に奢るとなり。

額に毛拔を當てる身。

面目を重んずる身分なりといふ義。額に毛拔を當てるは顏を美にすること即ち面目を毀損せざるやうにする意なり。

日田の紅烏賊。

豐後の日田は海を去ること遠きより紅爛せる烏賊を食ふとなり。

左衽。

淫勢のふるしからざるをいふ。

肱鐵を食ふ。

女を口説きて拒絶せられたるをいふ。

未刻に晴るゝ雨には簑笠をぬぐ。

未刻とは今の午後二時頃をいふ。此時刻に雨降りやめば天氣晴るとなり。

旱魃に凶歉なし。

旱魃の年は豐作にして米の收穫多しとの義。

人一寸。

人の身長は僅か一寸の差にて非常に差ある如く見ゆるをいふ。

人の一寸は見ゆれど我一尺は見えず。

人の一寸我一尺に同じ。

人の痛いのは三年でも辛抱する。

人の苦痛に對して同情心の薄きをいふ。人の痛さは三年でも堪へるともいふ。

人の言途と餅はつく程よし。

他人の勸め奚る、事に從ふがよしとの義。

人の提灯で明とる。

人の物に依つて自ら利する喩。人の嚏鼻糊で相撲に同じ。

人の針程は見ゆるが我が棒ほどは見えず。

人の一寸我一尺に同じ。

人の眼の塵。

他人の惡事のみ見るをいふ「新約全書」「汝兄弟の目にある塵を見て己れが目にある梁を知らざるは何ぞや。」

人は和に如かず。

人は互に相和するが最も大切なりとの義。

人は惡かれ我善かれ。

人の惡からんことを欲し、我が獨善からんことを欲す

る勝手なる人をいふ。

一人子と一ばい船は持たぬがまし。

一人子を持ちたると、一艘船を持ちたるとは、孰れも氣を痛むるもの故寧ろ持たざるが優るとなり。

人を許すとも己を許すな。

人を責むること寛にして、己れを責むること嚴重にせよとの義。

雲雀の口へ鳴子。

よく喋舌する者をいふ。

日比谷の蛙。

代議士の事、帝國議事堂の日比谷にあるを以てなり。

貧乏少尉遣繰中尉どうぞこうぞ大尉。

將校中少尉中尉は俸給少くして、生計に窮し、大尉に至りて僅に生計を凌ぎ得らるとの義。

貧乏な伯母の所へ行くよりは秋山へ行け。

飛驒の諺。秋山へ行けば菓實菌類等收獲すべきもの多し故にいふ。

貧乏に棒なし。

赤貧にして如何ともしがたしといふ義。

百貫の鷹も放さねば知れず。

談じて見なければ分らぬといふ意。話さねばと放さればとを通はせたるなり。

百姓讀。

漢字の音を誤り讀むを言ふ。

百年河清を待つ如し。

其の效なしとの義。河は黄河のこと、水濁り居りて幾百年待つも清くすむことなし故にいふ。

冷飯食ひ。

部屋住居のこと。

日傭取と西の風は其の日限。

千葉邊にていふ。日傭取とは一日限り雇はるゝものをいふ。

日和見の烏。

高くとまるといふ謎。日和見の烏で高くとまるともいふ。

非力百倍。

非常の場合には平素に百倍の力が出るとなり。

畫行燈。

賢愚の判然せざる事。大石良雄の綽名。

びる、どんぼ、がにげへる。

蛭、蜻蛉、蟹、蛙、のことを盛岡地方にてはかくいふなり。又千葉縣因旛郡地方にてもびるどんぼがにがへるといふ。

廣島の三かき。

廣島にて名高きものは、柿、牡蠣、花柳病、の三なりといふこと、

ふ

夫婦喧嘩と夏の餅は犬も食はぬ。

夫婦間の爭は人相構はずとの義。

夫婦喧嘩と西風は夜に入つてなほる。

西風と夫婦喧嘩は夕限りに同じ。

鰹のやう。

よく寢る人をいふ。

袋たゝき。

衆人相集りて一人を毆打するをいふ。

袋耳。

記憶の強きをいふ。袋にものを入れたる如く忘れぬ意

武將の三勝。

我に勝ち味方に勝ちて敵に勝つをいふ。源義經の語、

巫山の夢。

男女快夢を結ぶ事。楚の襄王高唐に遊びて午睡せし時、一婦人來りて曰く、妾は巫山の神女なり、願くば枕石を薦めんと、女去るに臨みて曰く、妾は巫山の高陽宮の岨にあり旦に雲と爲り、暮に片雨となると。

武士の一言金鐵の如し。

武士の然諾を重んずるの堅きをいふ。

武士の子は繼の音に目をさまし、商人の子は算盤の音に目をさまし、乞食の子は茶椀の音に目をさます。

武士の子商人の子乞食の子各其氣品の異なるをいふ。人は其の修養感化の如何によりて種々の運庭を生ずるに至るをいふ。

負薪の憂。

病氣といふことの謙辭。薪をも負ふに堪へずとの意。

不信の龜は甲をわる。

人と約して其れを守ること能はざる者は我身の不利を來すことありとの喩。『今昔物語』「今は昔天竺に世間旱魃して天下に水絶えて背き草葉もなき時ありけり。その時に一つの池あり、その池に一つの龜住す、池の水旱り失せて、その龜死ぬべし。その時に一つの鶴のこの池に來て喰ふ、龜いで〻鶴にあうて相語つて曰く汝と我と前世の契ありて、鶴龜一雙に名を得たり、と佛說きたまへり、經數にもよろづの物の譬には鶴龜を以て譬へたり、然るに天下旱魃して、この池の水失せてわが命絶えぬべし、汝われを助けよと。鶴答へて曰く、汝がいふ所二つなし、われ理を存せり、實に汝が命明日に過ぐべからず極めて哀れに思ふ、われは天下を高くも低くも飛び蟠ること、心に任せたり、春は天下の草木の花葉色々にして、めでたきを見る。夏は農業くさ〻に生ひ榮えて樣々なるを見る秋は山々の荒野に紅葉の妙なるを見る冬は霜雪の寒水山川江河に水凍りて鏡の如くなるを見るかくの如く四季に隨うて何物か妙にめでたからざるものはある、乃至極樂界の七寶の池の自然の莊嚴をもわれ皆見る汝は只この小池の萬内だに知りがたし、汝を見るに實にいとをし、されば汝がいはざる前に、水のほとりに將て行かんと思ふ。但しわれ汝を背にす能はず、抱かんにも力なし、口にくはへんにもたよりなし。只すべき樣は一つの木を汝にくはへしめて、我等二つして木の本末をくはへて、將て行かんと思ふに、汝はもとより極めて物痛くいふものなり、汝われに問ふことあり又われも誤りていふことあらば、互に口開きなば、落ちて汝が身命は損はれなん、いかゞといへば、龜答へて曰く將て行かんと宣ほゞわれ口を縫うて更にいふことあらじ、世にあるものゝ身思はぬやはある。鶴のいはく、つきぬる病は失せぬものなり、汝猶信ぜじと、龜の曰く猶更にいはじ、猶將て行けといへば龜に木を加へしめて、鶴二つして木の本末をくはへて、高く飛びゆく時に、龜池の萬内を習うて、いまだ見も習はぬ所の山川谷峰の色々にめでたきを見て、極めて感に堪へずして、こゝはいづこぞといふ。鶴も亦忘れてこゝかといふ程に口あきければ、龜落ちて身命を失ひてけり。これによつて物

痛くいひ習ひぬるものは、身命を顧みざるなり。佛の守口攝意慎莫犯等の文は、これを說き給ふなるべし。また世の人、不信の龜は甲わるといふは、此事をいふとぞ。」

豚に眞珠。

愚者に道を說くも聞かざるをいふ。『新約聖書』「豕の前に爾等の眞珠を投げ與ふるなかれ恐くは足にて踐みかへりて爾曹を噬みやぶらん。」

佛祖の涎ぬぶり。

自家獨創い見なく、徒に古人の糟粕を嘗むるのみといふ義。

文久錢。

吝嗇漢のこと。文久錢の裏には文の字あり其下に方孔あり、合すれば吝字となる故にいふなり。

文口。

吝なるをいふ。吝の字を二つに解きたるなり。

冬の雪賣。

時機其宜しきを得ざる喩。

ふた——ふつ——ふん——ふゆ——へ——へけ——へこ——へた
へて——への

へ

へけ。

駄目と云ふ事。又た惡しと云ふ事。明治の始長崎地方外人の居留地に流行せし語なるが、今は普通の俚諺となる。馬鹿を羅馬字にて、BA KA と書けるをヘケと讀みたるならんとは大槻博士の說。

屁漉し。

糊の事。糞通しに非ず屁漉しなりとの意。

へたの道具しらべ。

技に拙なるもの徒に器を詮議するをいふ。

ペテンかけらる。

籠絡せらるゝ事。

へのへのもへ桶の環をかむる。

小兒の人の顏を書くにいふ。

屁一つが薬千服。

放屁の衛生に利あるをいふ。

蛇となつて金を守る。

甚しき守銭奴のことをいふ。「賢愚經」「一人あり一生勤苦して財寶を蓄へ瓶に入れて之を埋め置き遂に死せり、その靈、蛇となり來りて瓶を守り離れざりしと。是れ其の出處ならん。

蛇に咬まれて朽縄に驚く。

黙犬にかまれて灰汁のたれかすに驚くに同じ。

蛇の如く智く鳩の如く順良しかれ。

キリストの弟子を教へし語より出づ。

へんくつげん。

變屈なる人をいふ。屈原汨羅に身を投げしよりいふ。「死なずともよかるべきに身を投げて、變屈原と人は云ふらん。」

ぺろり山椒味噌。

ぺろりは舌を出す形容、又山椒味噌を嘗むるときに舌を出すなり故に舌を出すことをぺろり山椒味噌とつゞけていふなり。

ほ

矛先がなまる。

論旨の段々鈍くなる事。

ホコトン。

矛盾を讀み誤りて云ひしより遂に俚諺となる。

法華經乾鮭。

共にすたるところなし。

法華と念佛犬と猿。

法華宗と念佛宗(淨土宗)との不和なるをいふ。

菩提の鹿招けども來らず。

菩提心の生ぜざるをいふ、菩提とは煩惱を去つて覺りに入ることをいふ、煩惱の犬追へども去らずといふより之を對句にしたる諺なり。「涅槃經」「又如二家犬不レ畏レ於人、山林野鹿見レ人怖去一喧恚雖レ去如二守家狗一、慈心易レ失、如二彼野鹿一。」

時鳥は冥途の鳥。

古來いひ傳へたる俗説なり。伊勢の歌に「死出の山こえてや來つる時鳥戀しき人の上語らなむ」。

佛さかれば魔さかる。

佛の勢盛なるときは魔の勢力も盛なりとの義。

賞めらるゝ身の持ち難さ。

人に褒められれば其れに對する本分を盡さゞるべからず徒に聲聞のみありて實行之に稱はざれば、頗る恥づべきことなり故に人にほめらるゝものは其身を持すること容易ならずとなり。

ま

罷り違ふ。

相違すること。罷り間違へばといへば相違すればの意。

時繪の天秤棒をかつぐ。

將來大藥商になるといふ空想。

馬士にも衣裳。

衣裳次第にて、よからぬものも、よく見ゆとの義、

孫の可愛と向脛の痛いのは堪へられぬ。

孫を愛する情の特別に厚くして堪へられざるをいふ。

桝の下の燈火。

善行の隱れたるをいふ。「新約聖書」「燈を燃して斗の下に置くものなし、燭臺に置きて家に在るすべての物を照さむ。」

まだ青い。

未然なりとの義。

まだ雪の重みは知らず今年竹。

未だ幼稚にして經驗の足らざるをいふ。竹は雪に壓せられて重みを受くるなり、然れども今年生えた竹はまだ雪の重みは知らざるなり故に喩とす。

松前の殿樣鯡でお茶漬。

松前邊にて良き鯡の多く漁することをいへるなり。

招けど來らぬ菩提の鹿。

菩提心の生じがたきをいふ。菩提の鹿招けども來らず

の條を見るべし。

萬石より上は神。

人間の勢力には限りあるものにて、其れ以上は神の勢力範圍なりとの義。

滿足滿足千萬足。

至極滿足の體にいふ。

豆板の上に倒けたやう。

寂寞の甚しきをいふ。豆板は大豆を砂糖にて閉ぢ固めたる菓子なり。

豆を煮るに箕を燃く。

兄弟相鬩ぐをいふ。曹植の詩に「豆を煮るに箕を燃く豆は釜中に在りて泣く、本是れ同根より生ず、相煮る何ぞ甚だ急なる。」とあるより其の起句を取りてかくいふ。

み

磨けども磷がず涅むれども緇まず。

如何なる風俗の中にありても、染まざるをいふ。

見ず轉。

藝妓の多情なるをいふ。相手の誰彼を見ずして轉ぶ意。

味噌副食を食べば倉を得たてぬ。

俗說。

三田の三角廻れば四角裏は薩摩の七曲り。

東京芝區三田には四國町といふがあり、往時薩州侯の邸此邊にありて街路甚だ迂曲せり、故に七曲りといふなり。三角といふより四角といひて四國に通はせ、三と四と合せて七となるより七曲りといひなせるなど、言葉の上に妙趣あり。

三たび肱を折つて良醫となる。

多くの患者を取扱ひ治療の失敗などをして初めて良醫となるとの義。

道高ければ魔盛なり。

道德の高き時一方に魔道の盛なるをいふ。

道を盲人に問ふ。

盲人に道を問ふ(メの部)に出づ。

三日つゞいて霜降る時は必ず雨降る。

解に及ばず。

三日天下。

志を得て世にときめく間の短きをいふ。光秀の天下參照

稅吏も然せざらんや。

無人でも失れ位の事はするとの意「新約聖書」汝等おのれを愛する者を愛するは何の報賞あらん稅吏も然ぜざらんや」當時の稅吏は殘忍酷薄なりしなり。

三妻錐。

妻を三人持てる者をいふ。源平盛衰記豐明節會の條に

水を離れた河童。

あり。

河童は能く游ぐものなれども、水を離れては其能をなす能はず、人の依憑する所を失ひて能を顯はすこと能はざる形容。

三年の後の初枕。

失死して三年間嫁がず、後再緣せるをいふ。「伊勢物語」「新玉の年の三とせを待ちわびてだゞ今宵こそ新枕すれ。」

南風を食つた飴細工のやう。

だら〳〵と崩れ初むるなり。

美濃のヂヤ言葉。

美濃の方言ヂヤを多く用ふ。

蚯蚓きり。

農夫のこと。耕作の際鋤鍬等にて間ま蚯蚓を切ればなり、

耳より入りて心に著く。

記臆力ある人をいふ。

耳を掩うて鐘を盜む。

耳を抑へて鈴を盜むに同じ就きて見るべし。

耳を取つて鼻をかむ。

出來得べからざることをいふ。とつてもつかぬことをする喩。

容貌は果報の下地。

容貌の美は果報の基即ち幸福の一要素なりといふこと。

容貌は幸の花。

美貌なる者の幸福を受くる事あるをいふ。容貌を花に喩へ、幸な果實に比したるなり。卽ち容貌は幸福といふ果實を生ずる所の花なりといふ意なり。

深山の紅葉。

年長じて倘春情なきをいふ。色づく事遲き意。

身を穿つ斧。

言語の事をいふ。言語を慎まざれば往々奇禍を招くことあるを以ていふ。

む

昔の因果は皿の緣を廻る　今は針の尖を廻る。

因果應報の至ること時によりて遲速の差あるをいふ。皿の緣を廻るとは遲き意。針の尖を廻るとは速き意なり。

むきになつて怒る。

戲言を眞正に受け眞向になつて怫然として怒るをいふ。

麥稈雞魚。

いさぎといふ魚は初夏麥の刈り取りて稈を乾す頃、其味最も好しとの義。

木畿子は三年磨ひても白くならず。

本性の移りがたき喩。

無稽の言。

根據なき言をいふ。

聟は座敷から貰へ　嫁は庭から貰へ。

我が娘を嫁すには身分財産の我が家より勝りたる所がよく、婦を取るには我が家より劣りたる所をよしとする義。聟は我が娘の夫をいひ、座敷と庭とは階級に尊卑の區別ある喩としたるなり。よめは卑い所から貰への條參照すべし。

聟は大名から貰へ　嫁は灰小屋から貰へ。

聟は座敷から貰へ嫁は庭から貰へに同じ。

虫が知らす。

精神の霊感作用をいふ。夫れとなしに知る事。

虫がすかぬ。

何といふ理由はなけれども、何となく嫌なるをいふ。

無常の虎が身を責むる。

人生無常の苦痛に身を打たるゝをいふ。

娘三人あれば財産が潰れる。

女子を養育するに多く費用を要するをいふ。

娘の子は强盜八人。

娘三人あれば財産が潰れるに同じ。

棟折れて榱崩る。

頭に立つもの零落すれば、其下に立つ者も共に零落するが如きをいふ。

無病なる身にも豫て灸治を加へよ。

事の未だ到らざる前に、豫て用意を怠るなかれとの戒。病氣い發生せざる中に、よく攝生に注意して、之れを怠らざれば遂に病氣は起らざるなり。

無明長夜の夢。

長らく迷の中に在りて、悟道を得ざりしことをいふ。無明の酒に醉ふの條參照すべし。

無明の闇。

無明の酒に醉ふを見るべし。

無用の用。

無用の者が却つて用を爲すことあるをいふ。

め

明鏡も裏を照さず。

智者も及ばざる所あるをいふ。

迷者道を問はず。

理に迷ふものは、自ら賢者ぶりて、人に道を問はずとの意。「筍子」「迷者不レ問レ道。溺者不レ問レ道。亡人好レ獨。」

めか一ちよん〳〵の十。

助平といふ事、「目力一丶ノ十」を組み合はすれば助平となる。好色家のことをいふ。

目藥程。

極めて少量なる喩。目ぐすりは少量を用ふれば足りなり。

盲人、瞎馬に乘る。

極めて危険なる喩。瞎馬は盲馬なり「世説」「矛頭斷レ米。劍頭炊レ米。百歳老人杖レ枯枝。盲人乘レ瞎馬。夜半臨レ深池。」

目に青葉山時鳥初松魚。

初夏松魚の漁し初むる季節のことをいふ。青葉茂りて、山時鳥啼く頃に松魚が都人士の口に上るなり。

目に一丁字なし。

華字を少しも知らざるをいふ。目に一丁字なしより轉じていへるなり。

目にて目を償ひ齒にて齒を償ふ。

反座的復讐のことをいふ。

目は廻り首は廻らず十二月。

窮乏者の歳除の狀況をいひたるなり。目廻るとは忙がしきをいひ、首廻らずとは何れを向いても借金だらけといふことなり。

面々の楊貴妃。

蓼食ふ虫もすきゞゞといふ如く人は各自に其の愛好する所一樣ならざるをいふ。情人眼裏有二西施一の意。

目を掩うて雀を捕る。

耳を掩うて鐘を盜むといふ如く愚動の愚なるをいふ。已れ目を掩へば、物を見能はずとて雀も然らんと思ふは大なる誤にて雀は依然として視覺を妨げらるゝことなければ、直に飛び去るなり。

綿羊の皮を被れる狼。

外面羊の如く裝へども內心は猛き狼の如き惡人をいふ。

も

蒙を發き落を振ふが如し。

容易なる業。蒙を發くは物の蔽を除くこと、落を振ふは枯葉を落すこと。

木魚講に入る。

婦人の胎みたるをいふ。木魚の如く腹の膨るゝをいふ。

餅の中から家根石。

北陸邊にていふ諺。有り得べからざる喩。極めて稀有なることの喩。北陸地方にては板屋根にて石を置くなり故にいふ。

勿體ないも賤しいから。

食物などの落ちたるを勿體なしとて食ふも心の賤しき故との義。

元の嬉正直。

もとの神正直といふを轉じてかくいふ。もと木にまさるうら木なしの義に同じ。

元の木椀。

元の木阿彌といふに同じ就きて見るべし。「翁問答」「四書五經を讀むと雖も、訓詁を記誦して、口耳の師となすばかりにて、心はもとの木椀に自滿の垢のしみつきたるものなれば、益はなくて却てあしくなり候」

元は歴々今はきれ〳〵。

昔は榮え今は衰へたるをいふ。レキ〳〵を倒に訓めばキレ〳〵なり。

悖りて出づるものは悖りて入る。

惡事を人に爲せば、身に惡報の來るをいふ。

桃栗三年後家一年。

寡婦の節操長く保らがたきをいふ。桃栗三年柿八年より轉じたるなり。

唐土の猫。

珍らしきもの、稀有のことをいふ。

や

養子と粉と笑うても飛び出す。

熬りたる麥を石臼に磨きて粉となしたるものをこづきといふ。食せんと欲して若し笑へば直に飛ぶ。養子は苟めなることにも不平を起して直ぐ飛び出すなり故に此諺あり。

楊震の四知。

秘密の事の漏れ易くして。誰も知るまじと思ふことの案外知るものゝあるをいふ。天知る地知る人が知る（テの部）の條を見るべし。

樣によりて瓢蘆を畫く。

古人の樣式のみ摸して發明する所なきをいふ。

疫病神で敵を打つ。

犬の糞で雖を取るといふよりも猶酷惡卑劣なる手段をいふ。

燒鳥にも綜緒。

かれて用心を忘らざる義。

やぐらを上げる。

憤怒強くして暴るゝをいふ。

藥鑵。

頭の兀げたるものをいふ。

藥鑵信心。

永く續かざること信心のさめ易きをいふ。藥鑵は熱し易くしてまた冷却し易き故にいふ。

藥鑵を曳き摺るやう。

歌ふ聲の惡しき形容。

屋敷を拂うて田を賣り給へてんてこ舞の尊。

天理教徒を罵りていふ。天理教信徒の惡しきを拂うて救けたまへ天理法の尊といふ祈禱の文句を取りて其の語呂を合せてかくいふなり。

野心を抱く。

現地位に安んずること能はずして心を他の一方に存する事、貪欲を倒ひ、之を馴さんとするも、心常に野を思うて現場所に安んぜざる知し。

安きに至つて氣をゆるすな。

人は至難の事に意を用ふること深けれども安きに至つて油斷を生じ、從つて不測の失敗を招くことあるものなれば、容易な事なりとて、油斷すなとの戒。危い所では言はねど大事にする(アの部)。山に躓かずして蛭につまづく(ヤの部)を參照すべし。

痩せ子の酢好。

己れと己れの不利益を爲す喩。酢をのめば痩する故に

屋根も尻も藁ぶき。

田舍には屋根を葺くに主に藁を用ひ、又雪隱にて尻を拭くに藁を用ふるをいふ。田舍にて或所に客僧を宿せしめ、主人が「客僧さんこゝは山家である故に屋根も藁ぶき尻も藁ぶき」と詠みければ、客僧も取敢へず「客僧も屋根の藁ぶき承知なれ尻の藁ぶきこまり入りま

す」と返歌したりとなん。

藪醫竹庵。

庸醫のことを人の名稱にいひなせるなり。或は云ふ古藪井竹庵とて頗る名醫ありしを後來其の反對の庸醫のことをいふに至れりと。

山階道理。

得手勝手の道理といふことなり、大鏡に出づ。

山田の僧都。

案山子の事。

大和豐年米取らず。

大和は水利不足の地なりされば此國に水の十分なる年は豐年なれども他の國に在りては凶作なり、故にいふ。

山鳥夫婦。

夫婦別居するをいふ。山鳥は雌雄一所に居らざればなり。

やみらみつちやの革袋。

やみらみつちや、菊石面といふことを強くいふにやみらとかぶせ、目鼻も分らぬ事にいふ。心の中は暗といふをかけたるなり。革袋、これもわけも道理もなく、ドツでもかまはぬ事にいふ。八文字屋ものなどに「何のヘチマの革袋」など多くありと櫻庭篁村氏著巢林子選註にあり。『曾根崎心中』『心の中はむしやくしやとやみらみつちやの革袋金事やら何じややら譯は京へも上つて來る。』

やむがを張る。

小兒の駄々くるをいふ。

ゆ

湯わかりは親でも惚れる。

女の湯より上りし時の容姿のめでたきをいふ。

熊虎の任。

將軍の任をいふ。

熊熊夢に入る。

男子を舉ぐることをいふ。熊腹中に入りしと夢見るは男子を姙むの兆なりの俗說。

湯子を取る。

子なき夫が相携へて温泉に入浴するをいふ。

揺り記者。

他人を脅喝して金錢を騙取する新聞記者をいふ。

夢に屁を踏んだやう。

とりとめなき事をいふ。

湯の辭儀は先。

風呂には先づ入るが却つて禮儀なりとの義。「繪本太閤記」「年寄には新湯が毒、湯の辭義はお先にとやら。」

よ

夜上りの雨は又降る。

降雨夜中に息めは日あらずして復た降り出すとなり。

酔うて管まきや尙可愛。

酒に酔うて管をまけば更に可愛との義。

酔うて本性顯はす。

酒は本心を顯はす(サハ部)に出づ。

慾の世の中。

人世は慾づくめとの義。

慾孕みて罪を産む。

罪惡は慾心より生じたる結果なりといふ義。

善く結うて惡く言はるゝ後家の髪。

寡婦が化粧して髪を美々しく結へば、却つて種々の惡しき評判を立てらるゝとの義。

預言者故郷に貴ばれず。

如何に出世したりとて故郷の人は之を貴ばずとの義。

爲僧勿歸鄉と意同じ。

横板に雨垂。

立板に水の反對にして訥辯なるをいふ。

夜寒郎麥好。

早春に夜の寒きは麥の生育に好しとのことを、人の姓名に擬して面白く洒落れたるなり。

よたん坊。

酔ひ倒れをいふ。

酔はして聞きたいことがある。

酒に酔へば平生沈默の人もよく兀舌を弄し、胸中の秘密をも洩して語り出すものなり故に酒に酔はして秘する所を聞かんと欲すとの義。

酔ひざめの水の味下戸知らず。

酔後に水を飲めば其の味實に美なれども飲酒家ならざるものは其美味を知らずとの義。

酔ひざめの水は甘露の味。

酔後水を飲めば其美味なること甘露の如しとの義。

酔ひても本地忘れず。

酒に酔ふと雖ども本心を忘れざるをいふ。

酔ひどれ怪我せず。

酔狂者の負傷せざるをいふ「莊子」「醉者之墜車雖疾不死、其神全也。」

四目十目。

結婚の年齢四ツ目と十目とを忌むをいふ。

嫁と姑も七十五日。

物事日數を經るに從ひて、次第に疎ぎ行くをいふ。嫁と姑とは、中の惡しきものなれども、七十五日經てば自然に疎らぎ行くといふ意。

嫁の朝立娘の夕立。

嫁が生家に行くには、早朝に家を出で、娘が婚家に歸るには夕方に家を立つとの意。

嫁の三日褒め。

姑が嫁の來りし當座三日丈褒めて、後は然らざるをいふ。新奇を喜びて永くつゞかざるをいふ。

ら

來年は〳〵とて暮れにけり。

來年はかく〳〵せんと豫期しても、何事も豫期通りに運ばず、遂に年は暮るといふことにて、志業成りがたく歲月の徒に過ぎ易きをいふ。

老人の子は影なし。

風俗通に曰く、陳留に富翁あり、年九十にして子なし、田父の母を取り婦となせるに、一交にして便ち男子を得たりとて、一家爭起りし時、丞相丙吉。思惟良久しうして曰く、曾て聞く、眞人影なし、老公の子影なし、又寒に耐えじと、共に之を試むべしと。八月其の小兒

を取り裸にせしに、獨啼きて寒を言ふ、又並んで日中を行かしむるに獨影なし、人戚な感服すと。此の故事よりいひならはせる諺ならん、又老人の子は寒がるともいふ。

老人の子は寒がる。

前の諺參照すべし。

老馬却つて駒となる。

老馬に乘者巧なれば駒の如く走ると云ふ意。老人の却つて若き人の如くなるをいふ。

らごらに母あり。

如何なる人にても情を解すとの義。らごらは釋迦の子なり「有漏地より無漏地に通ふ釋迦なれどラゴラが母はありとこそきけ。」

辣韮面。

額廣くして顎の邊細き色白き額をいふ。又た鐵面皮なるをもいふ。劉いでも〳〵皮ありと云ふ意。

藍田玉を生ず。

賢人賢子を産む事。諸葛瑾の子諸葛恪少くして賢なりしかば吳の孫權これを賞したる語。

り

犂牛の子捨つべからず。

父卑しとて賢き子ならばこれを捨つべからざるをいふ。論語に出づ。

利食千人力。

利益あらば早く他に賣るに若くなしと云ふ義。物品を高價に賣らんとて圍ひ置けば、金の利子にて非常に損目あればなり。

悋氣嫉妬は女の常。

嫉妬は女に取りては常例なりとの義。

悋氣嫉妬は女のたしなみ。

嫉妬は女の好むものとの義。

龍に攀ぢ鳳に附く。

賢主に從ふ事。

兩刀使。

兩手に刀を持ちて左右とも之を使用するといふことにて、酒をも飲めば甘き物をも食ふもの、卽上戸下戸相兼ねたるものをいふ。

離婁の明。

眼のよく見ゆるをいふ。孟子離婁章に出づ。

る

累卵よりも危し。

卵を積み累ねたるよりも、猶危險なりとの意にて、極めてあぶないことをいふ。「史記」范睢傳「秦王之國。危ニ於累卵ニ。得レ臣則安。」「文選」檄蜀文「去ニ累卵之危ニ。就ニ永安之計ニ。豈不レ美與。」

れ

醴水の交。

利の爲に交るをいふ。

燎原の火。

惡事の廣まり易きをいふ。原野を燎く火はげこり易し。

遼東の豕。

珍しからざる物を自ら珍奇なりと思ふ事。遼東に白頭の豕生れたれば、これを奇とし帝に獻ぜんとし河東に至れば、其地の豕皆な頭白かりきといふ漢書の記事に出づ。

連鷄共に棲まず。

兩雄并び立たずと云ふに同じ。連鷄とは繩にて其足を互に結びつけたるをいふ。

ろ

弄璋の喜。

男子の生れたるを喜ぶ事。璋とは半圭にして小兒に弄せしむるもの。

六尺の孤を托す。

遺子を托する事。六尺の孤は十四五歳の子なり。

鹿茸をかげば蟲胸をかむ。

俗說。

ロハ。

無錢と云ふ事。只の字を二に分ちたるなり。

わ

王儉を知りて天下富む。
天子儉なれば國富むといふ義。

王は十善神は九善。
我が國體の神よりも猶天皇を尊ぶといふ。十善とは十惡をせざること、十惡は、殺生、偸盜、貪欲、愚痴、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、瞋恚の稱。

我糞は臭くない。
我が惡しき事には、さほど感ぜざるといふ。自屎不レ覺レ臭の意なり。

我心石に非ず。
我が心は動かすべからずとの義。「詩經」「我心非レ石。不レ可レ轉。」

分らぬものは夏の天氣と人心。
人心の測るべからざるといふ。

湧く泉にも水涸あり。
如何に多く有すればとても、遂に盡くることあるといふ。

綿のやう。
我から吹く(綿は自分より吹き出すを以て喩とす)といふ意にて、自分で自分の事を吹聽する者といふ。又身體の疲れたるにいふ。

渡りをつける。
俠客、乞食などの仲間にある禮。甲の子分乙の親方の所に往けば、其の住所姓名を言ひ、一定の作法を爲し得たる者には、幾分の金を與ふる習慣あり。

破物と小娘。
用心せよとの義。疵物になり易ければなり

ね

圍碁双六は四重五逆の惡事。
圍碁雙六等の遊戯を爲すはよろしからずとの戒。

ゑ

醉うて管まきや尙可愛。
醉うて管まきや尙可愛。(補遺ヨの部)

醉うて本性顯はす。
ようて本性顯はす(補遺ヨの部)に出づ。

笑壺に入る。
心に叶ひたる事ありて喜ぶといふ。

醉はして聞きたいことがある。
(補遺ヨの部)に出づ。

醉ひざめの水の味下戸知らず。
(補遺ヨの部)に出づ。

醉ひざめの水は甘露の味。
(補遺ヨの部)に出づ。

醉ひても本地忘れず。
(補遺ヨの部)に出づ。

醉ひどれ怪我せず。
(補遺ヨの部)に出づ。

醉を惡みて酒を强ふ。
心と行と一致せぬ事。酒に醉へる人を厭ひながら、人に酒を勸むるといふ。

袁彥道。
博奕の事。晉の袁耽字は彥道といふもの博奕に巧なりし故なり。

遠慮は無沙汰。
遠慮の結果無沙汰となるといふ意か。

を

岡蒸汽。
記者のことをいふ、汽者と記者と國音同きよりいふ。

岡惚も三年すれば色のうち。
岡惚とは男女互に相愛し居るものを傍より惚るゝことをいふ。

岡惚を三年すれば乞食になる。

問愬を戒めてかくいふ。

屋下に尾を架す。

無益の事を爲す喩。

屋上の烏を愛す。

坊主憎ければ袈裟まで憎いの反對にて（坊主可愛ければ袈裟まで可愛）愛する人の屋根に宿れる烏まで愛らしとの義。「尚書大傳」「周公語二武王一曰、愛二其人一、者愛二其屋上烏一。憎二其人一者憎二其奴婢一。」

惜めば啞が食ふ。

食物を惜みて人に與へざれば、其食物の腐敗するか或は鼠害にかゝる如きあるをいふ。惜と啞と頭韻法を用ひたるなり。

膃肭臍の腹胎。

珍らしきこと、稀有のことにいふ。膃肭臍の腹ごもりは容易に見ること能はず。

男嘘言はず。

苟も男子たるものは虚言を吐くものにあらずとの義。

男になつた。

巨利を獲得したとか事業に成功したとか非常に得頓のことあるをいふ。

男は氣で喰へ。

男子は氣肌をよくすべしとの義。

男は三年に一度笑ふ。

男子の平素げらゲラ笑ふは威儀を損する恐あれば宜しく笑を少くすべしとの義。

尾道鳶に鞆烏、三原雀に眼をぬかれな。

備後の諺其地方の人氣の惡しきをいふ惡烏雀何れも貪婪にして人の物を掠むる者の形容。

尾張大根水臭い。

尾張のものは薄情なりとの義。

女三人よれば姦しい。

女は多辯のもの故、三人よれば世間の噂などして、喧しきものなり、故にかくいふ。女の字三つよせたれば姦の字となるなり。

女には十二の角あり。

女には十二本の角ありて、此の角は子一人を生めば一本を脱す。十二人を産みて全く脱落せざる限りは嫉妬心ありとの俗説。

女七分に男三分。

家庭に於ける庶化の力は婦人が男子に優るとなり。

女ならでは夜が明けぬ。

好色の男をいふ。御伽をするもの女子にあらざれば夜を明かすこと能はずとの意にて、女子を要求することの甚しとの義なり。

女の恐がると猫の寒がるは虚僞。

解に及ばず。

女の憤鼻褌。

困り入るとの謎。

女の怜悧より男の馬鹿がよい。

女子の怜悧なるより、男子の馬鹿が猶優れる所ありとの義。

女の湯卷と世間の交際狹ひがよい。

往時女子の腰卷は狹く作るを利としたり。社交に狹ければ交際費を要せず、故に此諺あるなり。

折助根性。

人の見る所にては殊勝らしく働き、人の見ざる所にては怠るもの、心事をいふ。

折釘流。

至つて拙書の文字をいふ。

補遺 終

明治三十九年九月五日印刷
明治三十九年九月十日發行

便覽辭典
定價金壹圓五拾錢

編輯者　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　熊代彦太郎

發行兼印刷者　東京市日本橋區本町三丁目十七番地　金港堂書籍株式會社

代表者社長　東京市下谷區龍泉寺町四百十番地　原亮三郎

印刷所　東京市京橋區築地三丁目十五番地　帝國印刷株式會社

發賣所　東京市日本橋區本町三丁目　大阪市東區北久太郎町四丁目　金港堂書籍株式會社　金港堂書籍株式會社支店

不許複製

28. 5. 27